

一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 3 冊

俊 正 遺 跡

2008.2

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局



A～E区と周辺の風景（北から）



F区完掘状況（南西から）

卷頭図版 2



S D 01 出土の土師器杯（内面に黒色物質付着）



遺構から出土した近世の砥石

序 文

俊正遺跡は香川県丸亀市綾歌町岡田上に所在する遺跡です。一般国道32号綾歌バイパス建設に伴い、国土交通省四国地方整備局からの委託を受けた香川県埋蔵文化財センターが平成18年度に発掘調査を行ないました。その結果、古墳時代の堅穴住居跡と掘立柱建物跡からなる集落跡、中世から近世の掘立柱建物跡や灌漑用水路と考えられる溝跡などの遺構、土器類を主とした遺物を検出しました。古墳時代の集落跡はこの地に人の営みが開始されたことを示すものであり、また、中世の灌漑用水路とみられる大きな溝状遺構は水を得難いこの地を開墾するための先人の努力の跡でもあり、この地域の開発史に新知見をもたらす貴重な成果をあげることができました。

俊正遺跡の整理作業は、香川県埋蔵文化財センターが平成19年8月から4か月の期間で実施し、ここに「一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 俊正遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 渡部 明夫

例　　言

1. 本報告書は、一般国道 32 号綾歌バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県丸亀市綾歌町岡田上に所在する俊正遺跡（としまさいせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は、下記の期間で実施している。

期間：平成 18 年 4 月 1 日～10 月 31 日

担当：文化財専門員・宮崎哲治、佐々木和弘、調査技術員・藤井菜穂子（役職名は当時）

4. 調査に当たって、下記の機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

国土交通省四国地方整備局、地元自治会、地元水利組合、綾歌町教育委員会（当時）

5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は宮崎哲治が行った。

6. 報告書で用いる方位の北は世界測地系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。また、遺構は下記の略号により表示している。

SB 挖立柱建物跡	SD 溝状遺構	SH 堪穴住居跡	SK 土坑
SP 柱穴	SR 自然河川跡	SX 不明遺構	

7. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。

8. 石器実測図中、平面図中の濃いトーン部分および輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れを表す。なお、現在の折損は黒く塗りつぶしている。

9. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財团法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1993 年版』による。

本文目次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・整理の経過	2
第3節 調査・整理の体制	3

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第3章 調査の成果

第1節 地形	7
第2節 土層序	7
第3節 遺構・遺物	23
1. A・B区	23
2. C区（北区・南区・東区）	26
3. D・E区	27
4. F区	39
5. 包含層出土遺物	48
6. 近世の砥石	49

第4章まとめ	52
--------	----

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)	5
第3図 調査区割図 (1/2,500)	8
第4図 A・B区遺構配置図 (1/200)	9・10
第5図 C区遺構配置図 (1/200)	11
第6図 D・E区遺構配置図 (1/200)	13・14
第7図 F区遺構配置図 (1/200)	15
第8図 調査区土層断面図① (1/80)	17・18
第9図 調査区土層断面図② (1/80)	19・20
第10図 調査区土層断面図③ (1/80)	21・22
第11図 SD 01・05・07断面図 (1/40)	24
第12図 SD 01遺物実測図 (1/2・1/4・1/6)	25
第13図 SD 02断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/2・1/4)	25
第14図 SD 03断面図 (1/40)	26
第15図 SD 07断面図 (1/40)	26
第16図 SD 08・10・11断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	26

第17図	S D 10 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	27
第18図	S B 03 平・断面図 (1/80)	28
第19図	S B 03 遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)	29
第20図	S B 01 平・断面図 (1/60)・遺物実測図 (1/4)	30
第21図	S B 02 平・断面図 (1/60)・遺物実測図 (1/4)	31
第22図	S K 33 平・断面図 (1/40)	31
第23図	S K 34 平・断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	32
第24図	S K 39 平・断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	32
第25図	S K 10 平・断面図 (1/40)	33
第26図	S K 13 平・断面図 (1/40)	34
第27図	S K 16 平・断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	35
第28図	S K 18 平・断面図 (1/40)	35
第29図	S D 41・42 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	35
第30図	S D 14・15 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	36
第31図	S D 23 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	37
第32図	D・E区 S P 遺物実測図 (1/4)	38
第33図	S B 04 平・断面図 (1/60)・遺物実測図 (1/4)	40
第34図	S B 05・S A 03 平・断面図 (1/60)	41
第35図	S B 06 平・断面図 (1/60)	42
第36図	S H 01 平・断面図 (1/60)	44
第37図	S H 01 遺物実測図 (1/4)	45
第38図	S H 02 平・断面図 (1/60)	46
第39図	S H 02 遺物実測図 (1/4)	47
第40図	S D 56 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4・1/2)	47
第41図	S D 57 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)	48
第42図	包含層出土遺物実測図 (1/2)	49
第43図	近世の砥石実測図① (1/4)	50
第44図	近世の砥石実測図② (1/3・1/2)	51
第45図	遺構変遷図①	53
第46図	遺構変遷図②	54
第47図	遺構変遷図③	55

表目次

第1表 侯正遺跡周辺の遺跡	5
観察表	58 ~ 62

写真図版目次

普通図版 1	
A～E区と周辺の風景（北から）	
F区完掘状況（南西から）	
普通図版 2	
S D 01 出土の土師器杯（内面に黒色物質付着）	
遺構から出土した近世の砥石	

図版 1	
A区完掘全景（西から）	
B区南半完掘状況（南西から）	
図版 2	
B区北半完掘状況（南から）	
C区北・南完掘状況（南西から）	

図版 3	
C区北完掘状況（南東から）	
C区東完掘状況（北から）	
図版 4	
D区完掘状況（北から）	
D区完掘状況（北から）	

図版 5	S K 10 石組み完掘状況（北東から）
E 区先端状況（北から）	図版 18
E 区完掘状況（南から）	S K 10 石組み完掘状況（東から）
図版 6	S K 10 石出状況（東から）
F 区北半部先端状況（西から）	S K 10 先掘状況（北東から）
F 区南半部先端状況（南東から）	図版 19
図版 7	S K 13・S D 14 断面（北西から）
A 区南壁土層断面（北西から）	S K 13 石詰め完掘状況（南西から）
B 区東壁土層断面（北西から）	S K 13 完掘状況（南西から）
C 区東 西壁土層断面（北東から）	図版 20
C 区南 西壁土層断面（北東から）	S K 16 断面（西から）
C 区北 南壁土層断面（北東から）	S K 16 石組み完掘状況（西から）
D 区南壁土層断面（北から）	S D 41 完掘状況（北西から）
D 区南壁土層断面（北西から）	S D 42・S D 14・S D 15 完掘状況（南西から）
図版 8	図版 21
D 区東壁土層断面（西から）	S D 14 南北断面（南東から）
E 区東壁土層断面（北西から）	S D 14 東西断面（南西から）
E 区北壁土層断面（南東から）	S D 14・15 完掘状況（南西から）
F 区西壁土層断面（西東から）	S D 23 断面（東から）
F 区北壁土層断面（南から）	図版 22
S D 01（北）完掘状況（北西から）	S B 04 検出状況（北東から）
S D 01 断面 b（北から）	S B 04 完掘状況（南西から）
S D 01 断面 d（南東から）	図版 23
図版 9	S B 04 完掘状況（南西から）
S D 01 断面 e（南から）	S B 05・S A01 完掘状況（南から）
S D 01 石材出土状況（北西から）	図版 24
S D 01 遺物出土状況（南東から）	S B 05 完掘状況（南東から）
S D 01・02・03 完掘状況（北東から）	S B 06 完掘状況（南東から）
図版 10	図版 25
S D 01（左）と S D 02（右）完掘状況（南東から）	S H 01 掘出状況（北西から）
S D 02 断面（北から）	S H 01 完掘状況（南東から）
S D 03 完掘状況（南東から）	図版 26
S D 03 断面（南東から）	S H 01 西側横断面（北西から）
図版 11	S H 01 窪完掘状況（南東から）
S D 01・05 完掘状況（南東から）	S H 01 龍喰断面（南西から）
S D 05 断面（南東から）	S H 01 薩摩断面（北東から）
S D 07・01 合流部断面（南東から）	S H 01 通道横断面（北東から）
S D 07 断面（南東から）	図版 27
図版 12	S H 02 西半部完掘状況（南西から）
S D 08・10・11 完掘状況（南東から）	S H 02 完掘状況（北西から）
S D 08・10・11 断面（東から）	図版 28
図版 13	S H 02 西側横断面（南東から）
S D 08 南半部完掘状況（南西から）	S H 02 薩摩完掘状況（南東から）
S D 08・10・11 完掘状況（北西から）	S H 02 薩摩半部横断面（南東から）
S D 10 断面（南東から）	S D 56・S B 05・S H 01 完掘状況（南から）
図版 14	S D 57 断面（北西から）
S B 03 完掘状況（南西から）	図版 29
S B 01 完掘状況（北東から）	出土遺物（1）
図版 15	図版 30
S B 02 完掘状況（南東から）	出土遺物（2）
S K 33 ほか完掘状況（北から）	図版 31
図版 16	出土遺物（3）
S K 34・S D 41 完掘状況（北西から）	図版 32
S K 34 断面（南東から）	出土遺物（4）
S K 39 断面（南西から）	図版 33
S K 10 南北断面（南西から）	出土遺物（5）
S K 10 東西断面（南西から）	図版 34
図版 17	出土遺物（6）
S K 10 石検出状況（東から）	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

国道32号は香川県高松市と高知県高知市の県都同士を結ぶ重要な路線である。県内では高松市内を基点に綾歌郡綾川町、丸亀市、仲多度郡まんのう町、三豊市を通り抜け、阿讚山脈猪ノ鼻峠（猪ノ鼻トンネル）を経て徳島県三好市に続き高知市に至る。対向2車線の国道は、交通量が増加の一途をたどる現代社会においては狭小であり、交通事故の多発、交通渋滞によるCO₂排出量増加などの問題を引き起こす要因となってきたため、それに対応すべく現道の拡幅および歩道の敷設、バイパス路線の新設などが行われてきている。高松市西山崎町から仲多度郡まんのう町賀田に至る延長21.7kmの国道32号バイパスもそのひとつであり、一般に、綾南・綾歌・満濃工区の3つはそれぞれ綾南・綾歌・満濃バイパスと呼ばれている。この道路は中讃地域と高松市間の交通を円滑化して地域間の連携強化を図るとともに、幅員の狭い現国道32号の沿道環境を改善することを目的としたもので、1972（昭和47）年度より事業着手し、現在までに約20kmが完成・供用されている。綾歌バイパスの工事は東から西に向かって進められ、完成した部分から漸次供用が開始されている。平成16年には未着工部分であった国道438号との交差点やや東の地点（丸亀市綾歌町岡田東）から満濃バイパスに接続する室塚交差点（丸亀市綾歌町岡田上）までの区間2.5kmについても工事が開始された。

この事業計画を受けて、香川県教育委員会事務局文化行政課（当時、現・香川県教育委員会事務局生



第1図 遺跡位置図

涯学習・文化財課）は、平成 17 年 7 月と 10 月、平成 18 年 5 月の 3 回に分けて試掘調査を実施し、遺構・遺物の確認によって事前の保護措置が必要と判断した範囲を「俊正遺跡」と命名して遺跡台帳に登録を行った。その後、国土交通省四国地方整備局香川工事事務所との間でその保護措置について協議を行い、5,806 m²について発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は香川県教育委員会を調査主体、香川県埋蔵文化財センターを担当者として平成 18 年 4 月～10 月の予定で実施する運びとなった。

第 2 節 調査・整理の経過

発掘調査は、調査対象地を 6 区画に分割して南から順に A～F 区と呼称し、平成 18 年 4 月 1 日に A 区から発掘に着手した。調査方法は、香川県埋蔵文化財センターが現場作業員を雇用する直営方式を採用した。対象地は農地（主に水田、一部に畑）の中を横切るため、農業用の小水路と畦道が複数存在しており、それらを残しながらの調査となつたため、やむなく調査区をさらに小調査区に分割して調査を行なつた箇所もある（C 区）。また、B 区と C 区の間には幅 2 m を超える幹線水路があり、重機類が直接渡ることができずに入り口を設けた。このようないくつかの困難を創意工夫によって克服しながら調査を進め、当初の予定通り平成 18 年 10 月 31 日に調査区の埋め戻し・事務所の撤去などを含めた発掘調査を終了した。

また、調査時の成果については、平成 18 年 7 月 22 日に丸亀市教育委員会主催の「文化財の日」に協力する形で現地を広く一般に公開し、43 名の県民の参加を得た。

整理作業は、平成 19 年 8 月 1 日に開始し、11 月 30 日に終了した。出土品の洗浄は現地で終了していたため、遺物復元、実測遺物抽出、遺物実測、遺構・遺物図面トレース、レイアウト、遺物写真撮影、遺物観察表作成、原稿執筆、編集、台帳整備、収納などの作業を行つた。また、報告書刊行業務も平成 19 年度に実施した。

第3節 調査・整理の体制

平成18年度の発掘調査及び平成19年度の整理作業は、香川県埋蔵文化財センターが以下の体制で実施した。

調査（平成18年度）

香川県教育委員会事務局文化行政課（当時）

総括 課長 三谷雄治

総務・振興グループ

副主幹 河内一裕

主任 林 照代

文化財グループ

課長補佐 藤好史郎

主任 山下平重

文化財専門員 信里芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 渡部明夫

次長 横原正人

総務課 課長 野口孝一

主任 鳴田和司

主任 田中千晶

調査課 課長 廣瀬常雄

文化財専門員 宮崎哲治

文化財専門員 佐々木和弘

嘱託 高嶋勝英

嘱託 藤井菜穂子

整理（平成19年度）

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括・生涯学習推進グループ

課長 鈴木健司

課長補佐 武井壽紀

副主幹 古田 泉

主任 林 照代

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 渡部明夫

次長 廣瀬常雄

総務課 課長 野口孝一

主任 宮田久美子

主任 鳴田和司

主任 古市和子

文化財グループ

課長補佐 藤好史郎

副主幹 片桐孝浩

主任 白井洋二

文化財専門員 森 格也

文化財専門員 信里芳紀

資料普及課

課長 廣瀬常雄 (嘱託)

文化財専門員 宮崎哲治

嘱託 朝田加奈子

嘱託 伊井恵子

嘱託 磯崎福子

嘱託 岡崎江伊子

嘱託 奥田光輝

嘱託 香川和子

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

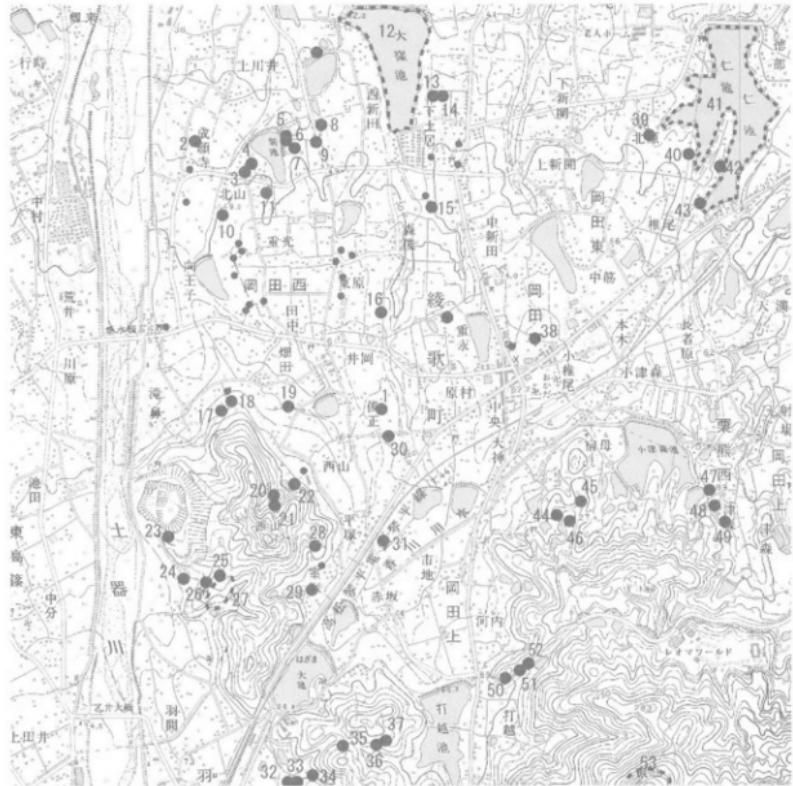
丸亀市は、香川県のほぼ中央部にあり、四国山地（阿讃山脈）の北裾部から海岸線にかけて広がっている。遺跡の立地する丸亀市綾歌町（旧綾歌郡綾歌町）は、平成の大合併により旧綾歌郡飯山町・旧丸亀市と合併して平成18年3月22日に発足した新「丸亀市」の南部にあたり、四国山地につづく山塊と洪積台地からなっている。この洪積台地は河川の開折作用によって大小複数の谷が形成されており、平地と接する台地末端部はヤツデの葉のように丘陵と谷が入り組んで連続する地形を呈している。大きな谷の中には大窪池や仁池などのように北側（平野側）に堤防を設けて仕切ることで溜池とされているものも見られる。俊正遺跡の調査地においても東側には大窪谷川が、西側には大東川がそれぞれ北へ向かって流下しており、この2本の河川によって形成された谷に挟まれた丘陵状の台地に遺跡が立地している。とりわけ東側を流れる大窪谷川の開折作用は著しいもので河床は深く低下しており、台地上との比高差は約12mを測る。

第2節 歴史的環境

俊正遺跡の周辺において、人々の活動の痕跡が窺えるのは旧石器時代からである。大窪池遺跡では水位が下がった際にサヌカイト製の国府型ナイフ形石器が1点採集されている。続く縄文時代でも、大窪池遺跡と仁池遺跡からサヌカイト製の石器がそれぞれ1点ずつ採集されているのみである。これらの時代の遺跡数・遺物量はまだまだ少ないが、近辺に遺跡が存在することを示唆するものといえよう。

弥生時代に入ても、知られている遺跡は少なく、それらは仁池周辺にまとまっている。仁池遺跡では池の内部に土器の散布が知られている。仁池西方の北原遺跡では後期の弥生土器を含んだ柱穴と浅い溝状の落ち込みが検出され、包含層からは多数の土器類が出土したことから集落が展開していた可能性が指摘されている。仁池の中央に半島状に突出した部分に位置する椎尾東遺跡ではベッド状構造を有する2本柱構造の堅穴住居跡1棟が検出され、内部からは弥生時代終末期の土器や石器が出土している。俊正遺跡南西方向に位置する西山の丘陵上には室塚遺跡がある。丘陵上では弥生時代後期の木棺墓と土壙墓からなる墓域が形成されており、周辺に造墓集団の集落が存在するものと思われる。近年の開発行為に伴う発掘調査で弥生時代の遺跡も次第に数が増えてきているが、まだまだ未知の遺跡が眠っているものと思われる。

古墳時代の集落は未だ知られていないが、周辺の山裾や微高地上には比較的多くの古墳の分布が見られることから、それらを造営した集団の集落が存在することは確実であろう。古墳については内容の判明しているものは少なく、そのほとんどは後期古墳である。遺跡南方の中津山には複室構造をもつ横穴式石室墳の安造田神社前古墳やモザイクガラス玉が出土した安造田東3号墳などを含む数基の後期古墳が存在している。中津山の東の前山には円墳の前山古墳群があり、かつて人骨が出土したと伝えられている。そのさらに東方に位置する津森穴薬師古墳は狭道を失った横穴式石室墳だが、現在、薬師如来を安置する玄室は残っている。俊正遺跡の北西方向、新池の周辺にはかつて前方後円墳1基を中心にして20基ほどの円墳から構成される群集墳の岡田万塚古墳群が存在していた。その大半は開墾等によって失わ



第2図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)

番号	種別	遺跡名	時代
1	集落	俊正遺跡	古墳・中世
2	墓	成願寺跡	中世
3	古墳	大塚	古墳
4	古墳	車塚	古墳
5	古墳	大林氏1号墳	古墳
6	古墳	大林氏2号墳	古墳
7	古墳	大庭麻績古墳	古墳
8	古墳	富野氏車古墳	古墳
9	古墳	西谷氏古墳	古墳
10	古墳	北ノ京古墳	古墳
11	古墳	光照寺麻績古墳	古墳
12	包含跡	大淀池跡跡	旧石器
13	包含地	下上居遺跡	
14	古墳	人坪井社古墳	古墳
15	墓	栗田山輪郭4号	中世
16	古墳	山伏塚	古墳
17	古墳	河ノ森古墳群	古墳
18	墓	河ノ森五輪塔	中世

番号	種別	遺跡名	時代
19	古墳	東坂古墳	古墳
20	包含地	西山遺跡	
21	寺院	照光寺跡	古代
22	古墳	西田經塚	中世
23	古墳	公文山6号墳	古墳
24	古墳	西山西部3号墳	古墳
25	古墳	西山西部2号墳	古墳
26	古墳	西山西部1号墳	古墳
27	古墳	出雲山古墳群	古墳
28	包含地	尾ノ森遺跡	
29	墓	密羅跡	弥生
30	城跡	俊正岡田塙跡	中世
31	城跡	平塙岡田塙跡	中世
32	古墳	安達田1号墳	古墳
33	古墳	安達田2号墳	古墳
34	古墳	安達田3号墳	古墳
35	古墳	平石3号墳	古墳
36	古墳	平石2号墳	古墳

番号	種別	遺跡名	時代
37	古墳	平石1号墳	古墳
38	遺跡	栗田城跡	中世
39	包含地	北原遺跡	古墳
40	墓	稚	古墳
41	墓	下新田塙跡	弥生
42	集落跡	椎尾東塙跡	弥生
43	古墳	椎尾古墳	古墳
44	墓	栗田3号石棺	古墳
45	城址	椎尾城跡	中世
46	墓	栗田4号石棺	古墳
47	墓	栗田1号石棺	古墳
48	墓	栗田2号石棺	古墳
49	古墳	津森穴築古墳	古墳
50	古墳	前山3号墳	古墳
51	古墳	前山2号墳	古墳
52	古墳	前山1号墳	古墳
53	城跡	西芦尾城跡(長尾城跡、山古城跡)	中世

第1表 俊正遺跡周辺の遺跡

れたが、現在もその名残りである土の高まりが見られたり、周辺には須恵器片の散布が見られるという。前方後円墳の車塚は、昭和13年の開墾に際して組合式石棺が掘り出され、中からは僅かな人骨が見られたという。周辺の開墾に際しては、鉄斧、鉄剣、須恵器、勾玉、管玉、紡錘車などが掘り出されたというが、そのほとんどは散逸してしまい行方不明という。

古代の遺跡はほとんど知られていないが、中世になると、西長尾城跡をはじめとする中世城館跡が見られる。西長尾城跡は標高375.2mの城山の山頂を中心に乗かれた城跡で、階段状の平坦地を作り出した郭跡や堅堀跡などが現在も残っている。長尾大隈守元高が応安元年（1368）に城主となって以来、途中天正7年（1579）に長宗我部元親の讃岐攻略によって長宗我部の軍門に下り、ついには天正13年（1585）の豊臣秀吉の四国平定により廃城になるまでの約200年間に渡り長尾一族によって守られてきた城である。城山の北麓周辺には椎尾城跡、岡田城跡が存在しており、当遺跡の南方には長尾大隈守の三男である岡田因幡守が住んでいたという平塚岡田屋敷跡も見られる。また、当遺跡近辺にも五輪塔や土師器の散布が知られており、中世より城館と関連した俊正岡田屋敷跡として周知されている。城館関係以外としては、中世の瓦片の出土を伝える蓮光寺跡が西方の西山に存在している。

近世には、当遺跡の近辺に寛永年間の大庄屋・岡田久次郎の屋敷である「岡田屋敷」が構えられていたという伝承と、久次郎の井戸と呼ばれる井戸1基が残されており、遺跡南方には久次郎の墓とされるものが現在も残されている。大庄屋は郡奉行と村方三役（庄屋・組頭・百姓代）の中間に位置して地方自治の全責任を負う最高機関であり、苗字帯刀を許され、家や服装も特別なものを許された名譽職である。四千石に余る土地を所有し、敷地一町二反歩を占める広大な屋敷を構えていたが、西島八兵衛の満濃池復旧事業に触発された久次郎は、多額の資材を投げ打ってまんのう町炭所東に亀越池を築き、土器川から岡田までの用水路を掘り、岡田の土地を潤すという悲願を果たしたが、家運は傾き久次郎の没後は子孫が四散したという。

＜参考文献＞

- ・『香川県史 第1巻 原始・古代』香川県 1988
- ・『一般国道32号徳島バイパス建設に伴う徳島文化財発掘調査報告 第2冊 羽間遺跡』香川県教育委員会ほか 2007
- ・『綾歌町史』綾歌町教育委員会 1976
- ・『新綾歌町誌』満濃町・綾歌町史編纂委員会ほか 2005
- ・『女造田東3号墳発掘調査報告書』満濃町教育委員会 1991

第3章 調査の成果

第1節 地形（第3図）

調査は、国道32号と国道438号が交差する岡田交差点の西方で、バイパス路線が現道から大きく西へ離れる部分の延長約200m、面積5,806m²を対象として実施した。調査地は大局的には四国山地から連続する洪積台地上の先端付近に位置しているが、河川による大小の開折谷によって東西を区切られた大きな舌状をした台地上に乗っているといえる。

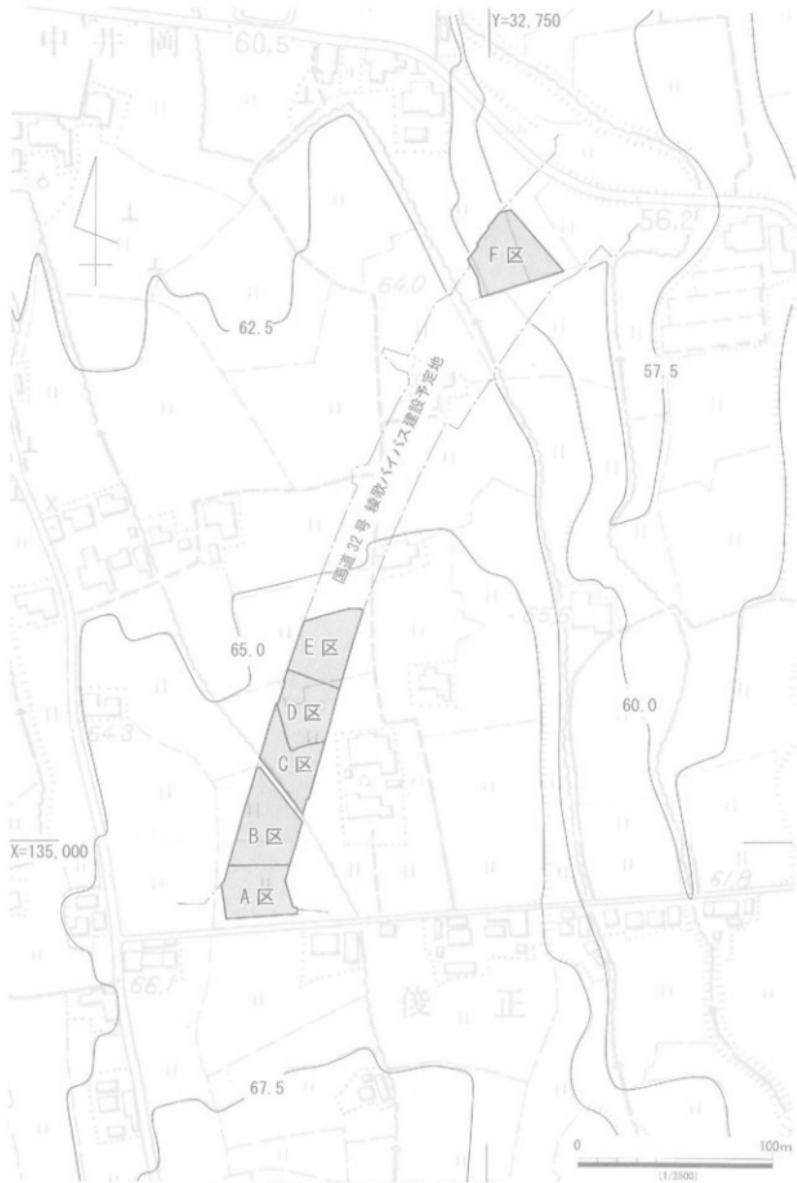
調査前の状況は、ほとんどが水田として土地利用されており、その中に僅かに宅地が散在して存在していた。水田部分は大小の水路や畦道で区切られており、その区画を利用して調査区割りを行っている。すなわち、南西から北東に向かって連続する部分を南からA～E区、北西方向にやや離れた飛び地状の調査区をF区として設定した。B区とC区の間には幅2mほどの規模の大きな用水路が流れており、また、C区の中央部（C区東とC区南の間部分）は南北方向の比高約50cmの小さな崖状となり東側が一段高くなっている。この高まりは台地のピークであるD・E区へ連続し、E区の北側からでは緩やかな段階状となって北方へ下る。さらに北方へ向かうと大窪谷川の段丘崖の斜面に連続していき、その斜面途中付近にF区が立地している。調査対象地は舌状をした台地を斜めに横切る形をとるために、地形と調査区の関係は、台地のピークがD・E区、一段下がった縁辺部分がA～C区、さらに開折谷に向けて下がった部分にF区という対応関係になる。

第2節 土層序（第8～10図）

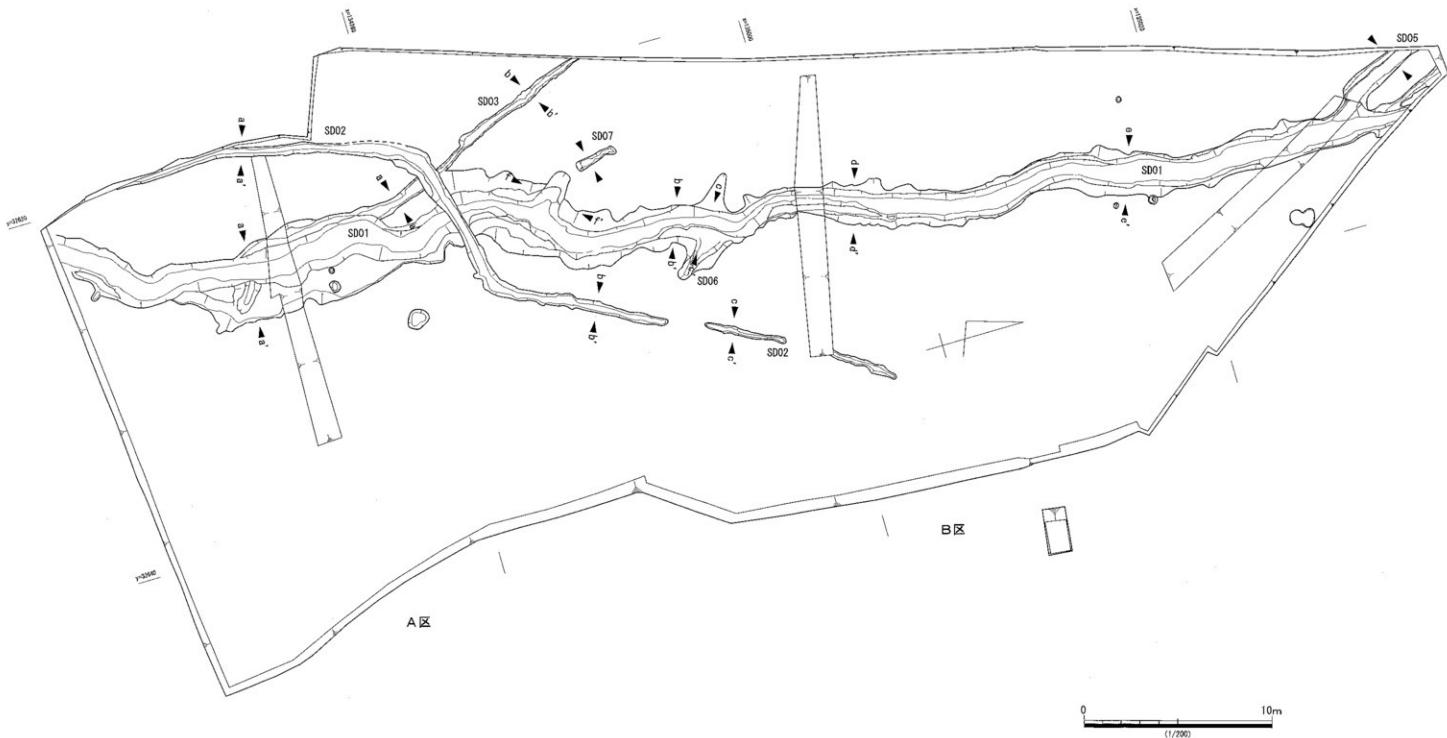
基本土層序については、前述した地形と調査区の対応関係による3つの分類によって異なる。

台地のピーク（D・E区）では耕作土直下で上面を平らに削平された地山層（明黄褐色系の粘土層）がみられ、その上面で遺構を検出している。E区の北端は北に向けて傾斜していたため、中世～近世の希薄な包含層（橙～褐色系の混細砂粘質土層）が20cmほど堆積している。

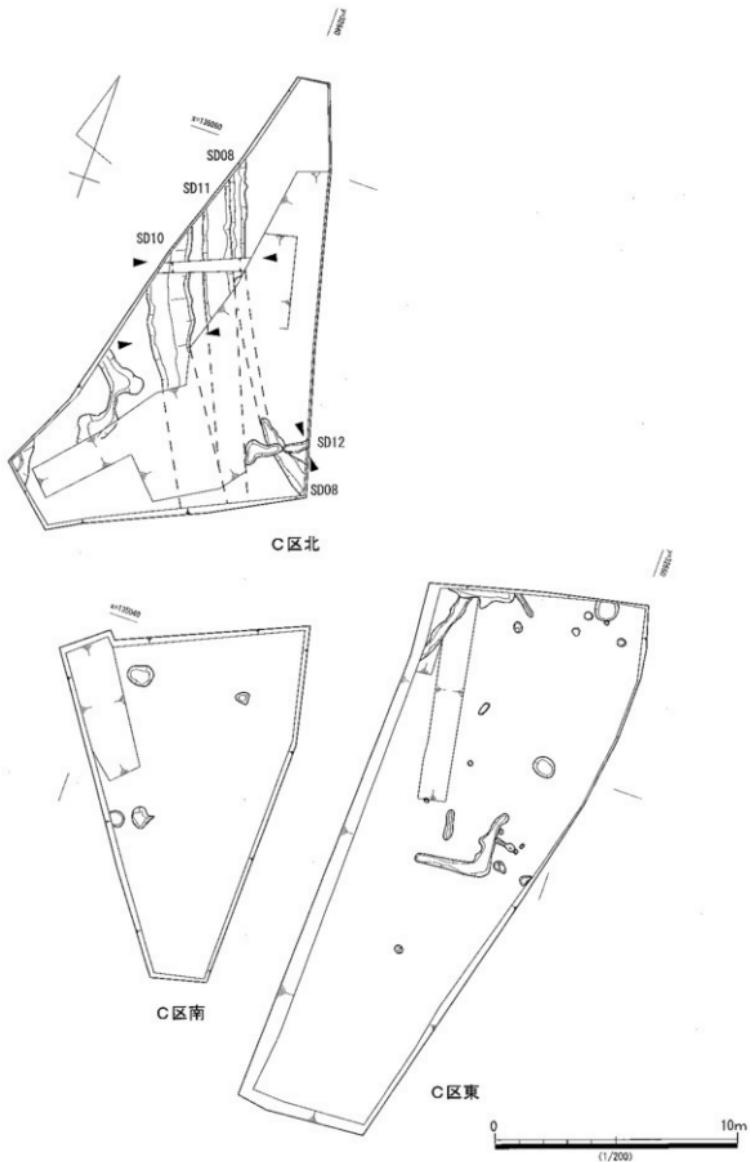
一段下がった縁辺部分（A～C区）については、C区東とそれ以外では少し様相が異なる。A・B区・C区南では基本的に耕作土の下に中世～近世の希薄な包含層（褐灰色系の混細砂粘質土層）が10～40cmほどみられ、その下に遺物をほとんど含まない黒色粘土層が20cmほど堆積している。この直下に上面を平らに削平された地山層（明黄褐色系の粘土層）が存在している。標高の高いA区の南端では耕作土直下に黒色粘土層が見られる。遺構はこの地山層上面で検出したがB区中央壁土層に見られるように黒色粘土層の上面から掘り込まれていることがわかる。古代末～中世の溝状遺構がこの黒色粘土層を切り込んでおり、溝状遺構以外の遺構が見られないことなどと合わせて、畦畔などは確認できなかつたが古代以前の水田耕作土である可能性がある。A区の北半部には造成土が盛られており近代以降に水田をつなげて大きくしたことがうかがえる。同様の造成土はC区東でも見られるが、こちらはC区東とC区南間の段差をD区とC区北間の段差に揃えることを目的としたものと判断される。C区北でも地山層の直上に黒色粘土層が見られるが、こちらの土層には少量の砂礫が混じり、打製石礫を含むサヌカイト片と繩文土器と思われる土器細片が出土しており、A・B区で見られた黒色粘土層とは異なる可能性が高い。



第3図 調査区割図 (1/2,500)



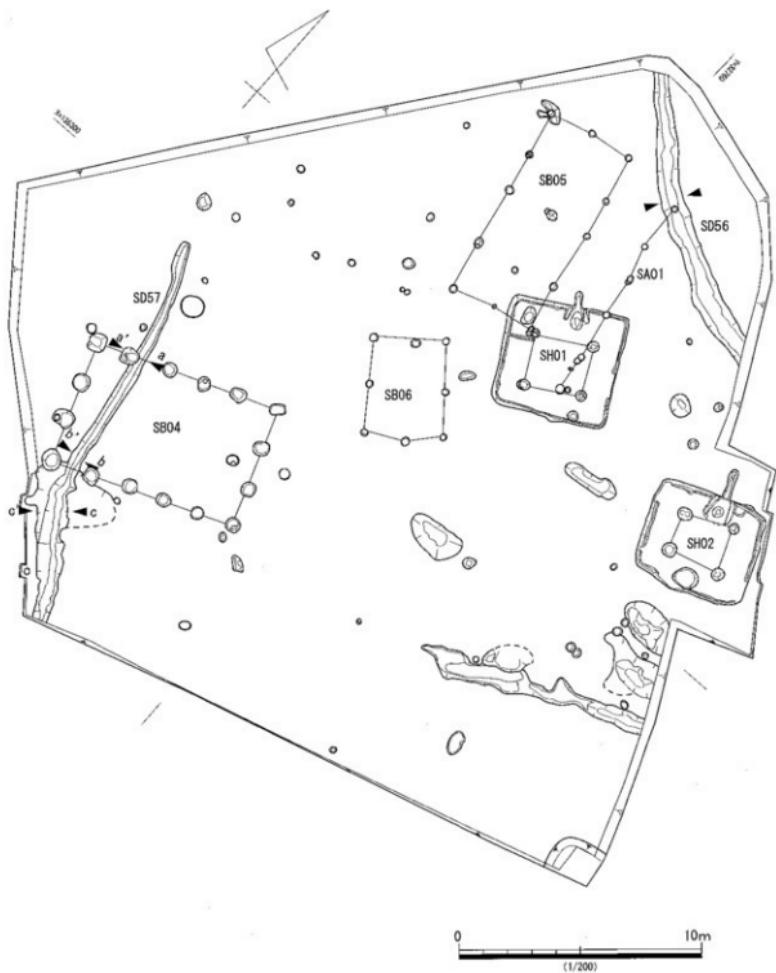
第4図 A・B区遺構配図 (1/200)



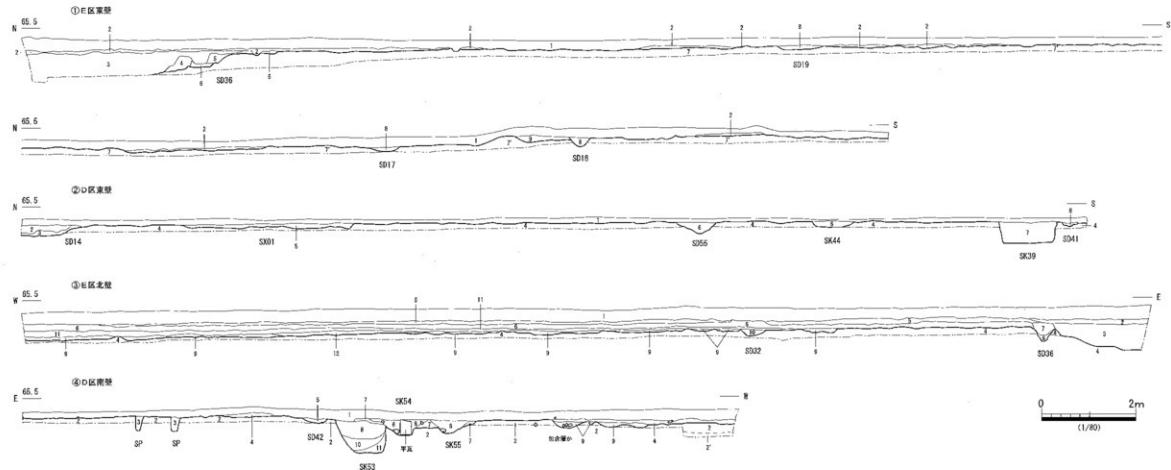
第5図 C区造構配置図 (1/200)



第6図 D・E区遺構配置図 (1/200)



第7図 F区遺構配置図 (1/200)



第8図 調査区土層断面図① (1/80)

① 例題選定

- 1) NAF(青緑搬出) 駆逐艦 → 機構生
- 2) SWE(オランダ船運送搬出) (Fe 級) → 駆逐艦
- 3) 7.5%Fe(高吸収率鉄質貢) (黄色土色土ブロック多い) → 旗艦の駆逐艦
- 4) 10%Fe(病弱吸収率鉄質貢) (上面に Fe 対) → 駆逐艦
- 5) 7.5%Fe(医療色,濃黒鉄質貢)
- 6) 2.5%Fe(医療色,濃黒鉄質貢)
- 7) 10%Fe(褐色鉄質) (上部付近に赤・橙・黄・緑指爪→駆逐艦のクサレし律が多い) → 旗艦
- 8) 7.5%Fe(褐色鉄質) (から縦筋の間に化粧化) → 地図
- 9) 7.5%Fe(4にこじら) 鉄質貢(駆逐艦) → 駆逐艦
- 10) 7.5%Fe(褐色鉄質) (駆逐艦)

②赤葉林

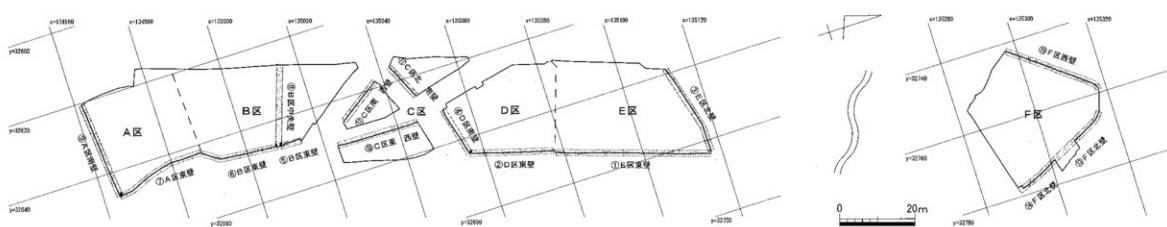
- 1 NS/黄赤葉松土 (ノホリ土) → 404 上層灌木
- 2 SYE/黄赤葉黄土 (ホシキ) → 504 下層灌木
- 3 SYE/I 黄赤葉混生砂利土 → 504 下層灌木
- 4 SYE/8 黄赤葉土 (クサザギモトヌカ) → 地山
- 5 SYE/6 黄赤葉細砂利質土 (ホシキ) → 5301 植木
- 6 SYE/6 黄赤葉粗砂利質土 (ホシキ) → 5301 4544 灌木
- 7 10TH/8 黄赤葉混生砂利土 (地山ブロックが多い) → 5839 灌木 基礎被覆されたもの
- 8 2 SYE/I 黄赤葉混生砂利土 → 5041 基土

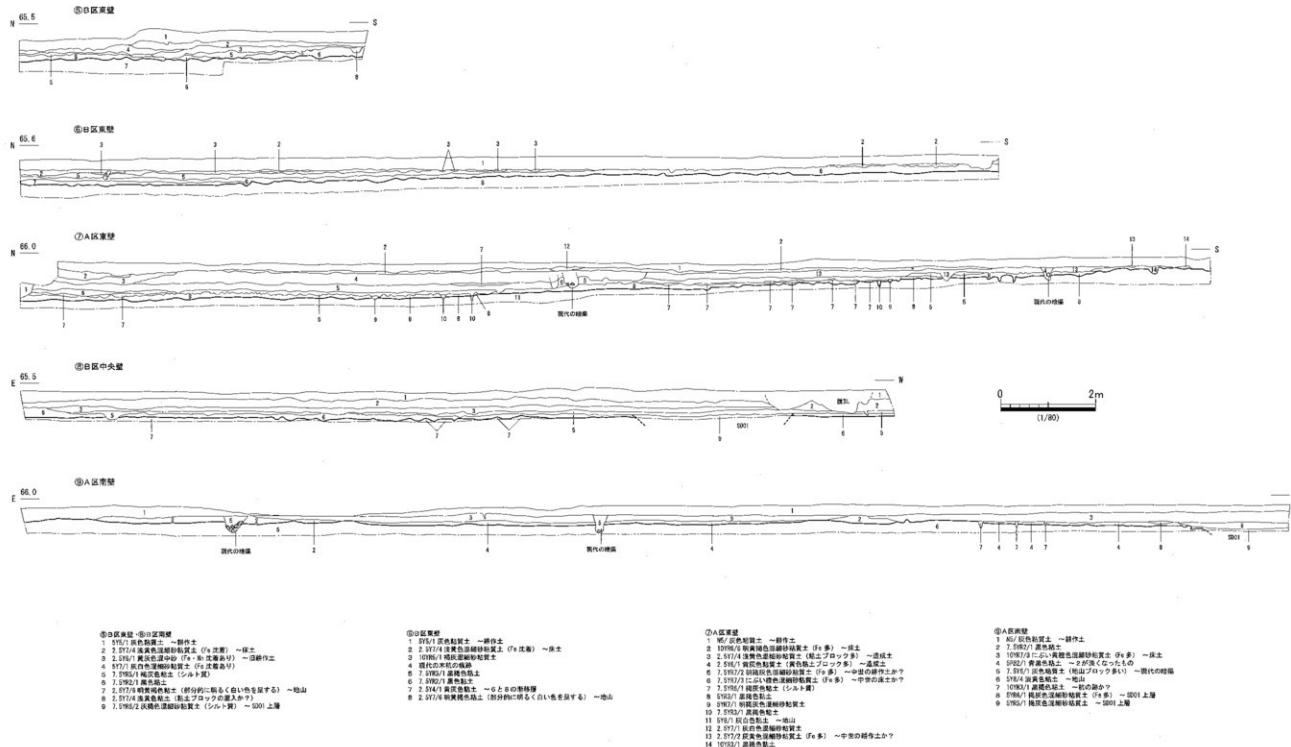
③深北群

1. 鮎川色（墨縞模様）粘質土。~耕作土。
2. 7.5%V6%褐色粘土。~廻耕の畠土。
3. 7.5%V6%褐色粘土。（褐色土質ブロック多い）。~耕代の畠土。
4. 10%V7.6%黒褐色粘土。土質：砂粘。粒相：粗粒化+拳入のカサレ種多い。~地山
5. 8%V6%黒褐色粘土。土質：砂粘。粒相：粗粒化+拳入。
6. 8%V6%黒褐色粘土。土質：砂粘。粒相：粗粒化+拳入。
7. 5.5%V6%黒褐色粘土。~耕作土。
8. 5%V6%V1.1%褐色粘土。~耕作土。
9. 5%V6%V1.1%褐色粘土。~耕作土。
10. 5%V5%V2%褐色粘土。~耕作土。

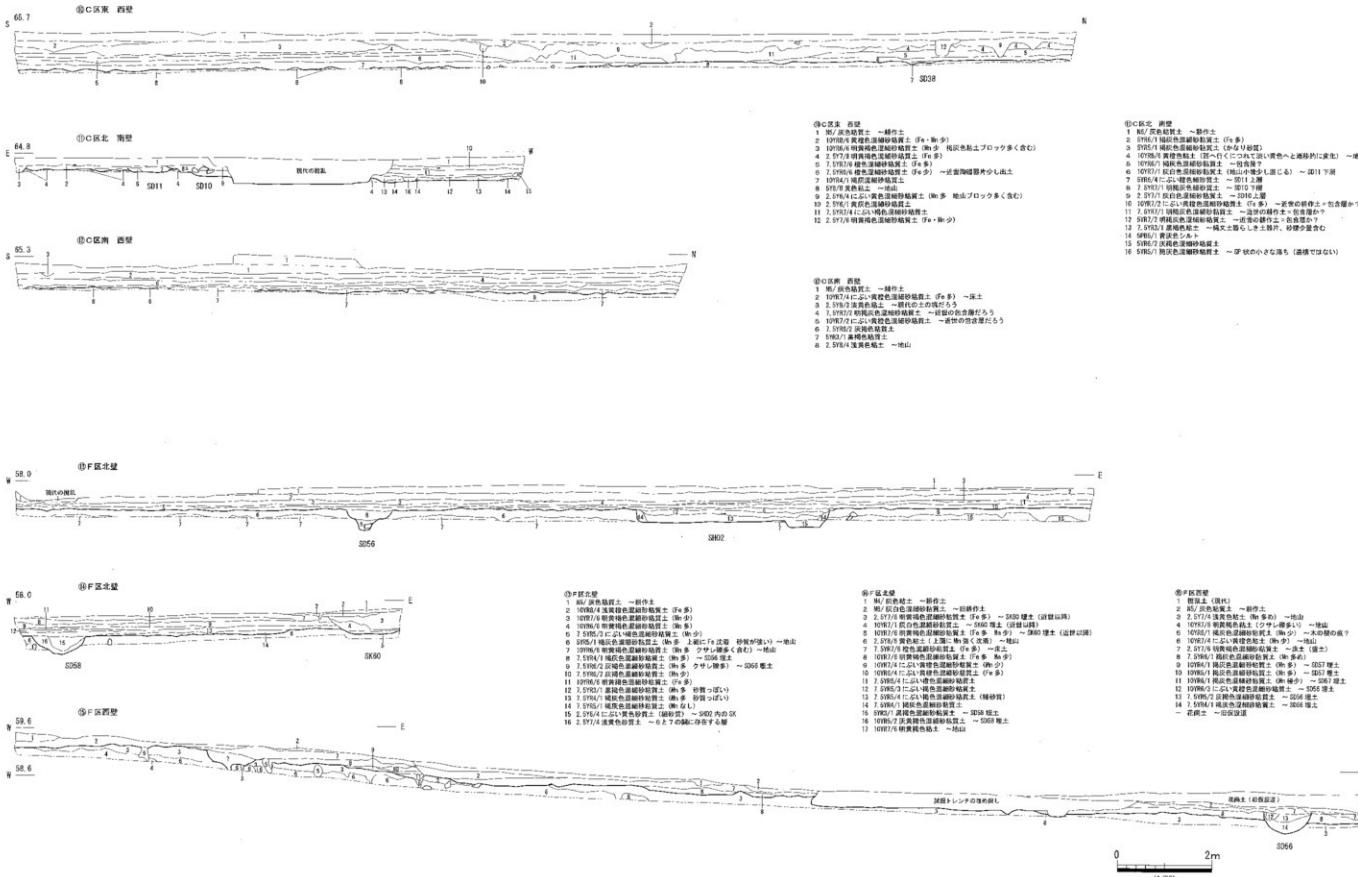
④ 土壌問題

- 1' 黒い灰色質土 - 深耕作土
- 2' 2.5% 黄褐色土 (カレハゲツイ) - 地山
- 2' 色が薄くなる (2.5% 黄色)
- 3' 2.5% 黄灰色地緑砂質土 - SP 増土
- 4' 7.5% 黄灰色地緑砂質土 - 地山
- 5' 10% 黄灰色地緑砂質土 - 地山 増土
- 6' 2.5% 黄褐色地粘土質土 (山林ブロックと焼土ブロックが入り混じる)
- 7' 5% 黄褐色地粘土質土
- 8' 2.5% 黄褐色粘土 (泥少)
- 9' 2.5% 黄灰色地緑砂質土 - 深い落葉込み (近畿以降の台原層?)





第9図 調査区土層断面図② (1/80)



第10図 調査区土層断面図③ (1/80)

い。

北に離れた開折谷に向いた斜面部分（F区）については、階段状に削平を受けており、耕作土直下に地山層（褐色～黄色系の粘土層）が見られる部分とその間に近世の希薄な包含層（にぶい褐色～黄橙色系の混細砂粘質土層）が存在する部分がある。なお、遺構は地山面の上で検出している。

第3節 遺構・遺物

今回の調査では、古墳時代後期・平安時代末～鎌倉時代・江戸時代という大きく3時期の資料を得た。これ以外に縄文・弥生時代に属する可能性のある土器小片と石礫を得ているが、遺構が伴わないので周辺にこの時期の遺跡が存在する可能性を指摘するにとどまる。巨視的に見ると、古墳時代後期の遺構はF区に、平安時代末～鎌倉時代の遺構はA・B・E区に、江戸時代の遺構はD・E区を中心に分布する傾向がみられる。以下、調査区ごとに報告する。

1. A・B区

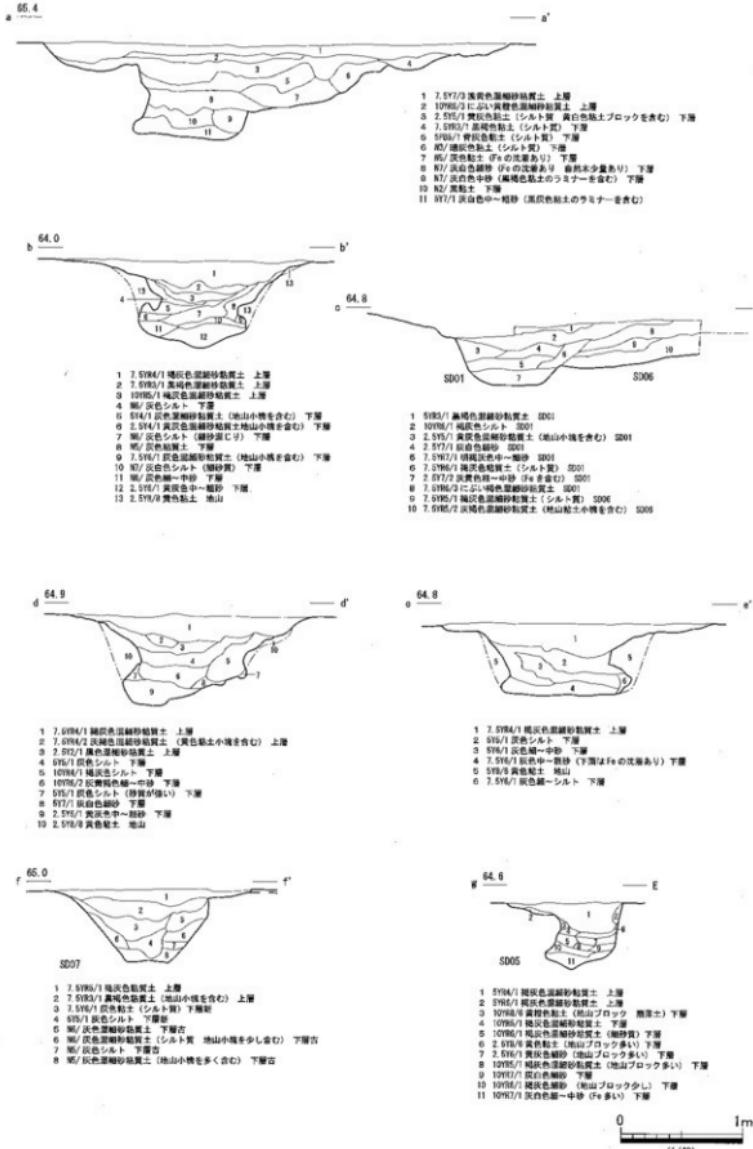
溝状遺構

S D 01 (第11・12図)

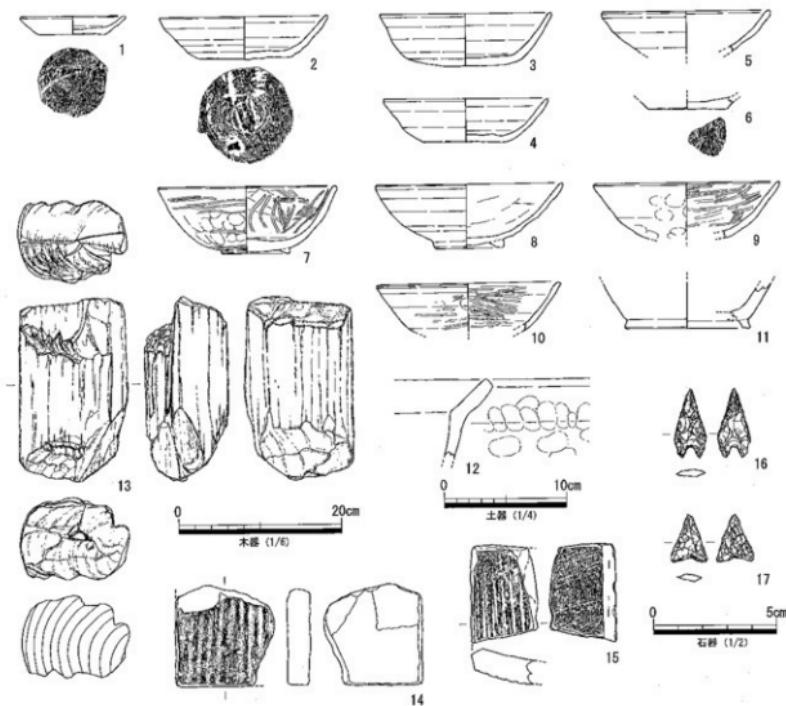
S D 01は調査区の中央を貫くように南から北へ向かって流下する溝状遺構である。かなり細かく蛇行しているが概ねN 10° Eの方向を有しており、北端でSD 05が西へ分岐しさらにそのすぐ北側でもうひとつ西へ分岐している。検出長約77m、幅1.6～3.8m、深さ約0.6～0.8mを測る。断面形状は逆台形を呈する部分が多いが、溝底の両側が大きく水流によって抉り込まれているため、中央部がオーバーハングした状態をとる。埋土は上下に二分でき、下層は砂・砂質土が、上層は粘質土が堆積しており、溝の底部は凹凸が目立つ。激しい流れによってほぼ埋没した後、蓄水状態のまま埋没したことがうかがえる。後述するSD 07との合流部の北側約3mのところに、巨大な石を数枚折り重なった状態で検出している。出土遺物は相対的に少ないが、そのほとんどが下層から出土しており、上層は少ない。図化した遺物以外に曲物の底板片、自然木（枝）、桃の種子などが出土している。

1は土師器小皿で、底面は回転糸切り調整である。2～6は土師器杯である。2～4の底面は回転ヘラ切り調整で板状圧痕が認められる。6は回転糸切り調整である。3の内面ほぼ全面に黒色物質が付着している。7～9は黒色土器碗である。7・8はB類であったと思われるがほとんど炭素が抜けてしまっている。9はA類と思われるが、外面の炭素が抜けてしまったB類の可能性もある。10は和泉型の瓦器碗である。11は須恵器壺の底部、12は土師器土鍋の口縁部である。13は用途不明の木製品である。面取りをした柱材を短く切り取ったような形状をしており、片方の小口部分は鈍い杭状にカットされており、他方は平たくカットされた痕跡が残る。14・15は平瓦である。凸面には平行綱目叩き痕が、凹面には布压痕がみられる。16・17はサヌカイト製の打製石礫で、弥生時代以前のものの混入品である。

黒色土器碗や土師器杯、瓦器碗の形態などから、12～13世紀の年代が想定され、ある程度の期間にわたって使用された溝状遺構であるといえる。



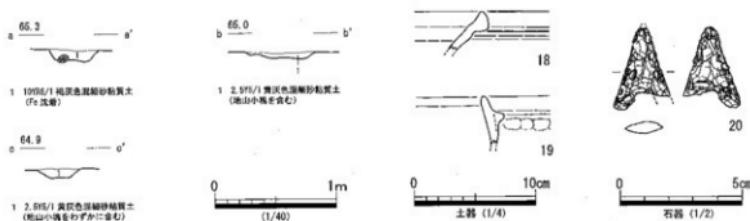
第11図 SD 01・05・07断面図 (1/40)



第12図 SD 01 遺物実測図 (1/2・1/4・1/6)

SD 02 (第13図)

SD 02は調査区南半で検出した溝状遺構で、SD 01・03の埋没後に掘られている。調査区南西隅付近から緩く弧を描きながら、途中で直線的にN 78° Eの方向に屈曲し、さらにN 28° Eの方向に再度屈曲している。検出長約47m、幅0.5~1.3m、深さ0.05mを測る。断面形状は浅い逆台形を呈している。

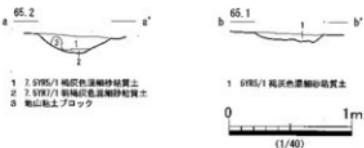


第13図 SD 02 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/2・1/4)

18は須恵器鉢で、口縁部を分厚く肥厚させている。19は土師器土釜である。20は混入した弥生時代のサヌカイト製打製石鎌である。出土遺物は少なく年代比定が困難であるが、土器の年代とSD 01の埋没後ということから14世紀代の年代が想定される。

SD 03 (第14図)

SD 03は調査区南半で検出した溝状遺構である。SD 01の上層と同じ埋土を有しており、SD 01下層が埋没した後に掘られた可能性が高い。検出長約13m、幅0.4~0.8m、深さ0.1~0.2mを測り、N 10° Wの方向を有する。年代特定ができる遺物はなく、SD 01と同時期の13世紀代に機能していたものと想定できる。



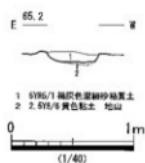
第14図 SD 03断面図 (1/40)

SD 05 (第11図)

SD 05は調査区北端付近でSD 01から西へ分岐する溝状遺構である。検出長約4m、幅1~1.4m、深さ0.5mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土はSD 01同様に下層に砂・砂質土・上層に粘質土が堆積している。遺物は細片しか出土していないが、堆積状況などからSD 01と同時期に機能していたことがわかる。

SD 07 (第15図)

調査区中央で検出した溝状遺構である。途切れていますが本来はSD 01につながっていたものと思われる。検出長約4.3m、幅0.5~1.1m、深さ0.4~0.8mを測り、途中で北方向へ屈曲する。少量ではあるが焼土と炭が出土しており、土器は須恵器楕の底部片(貼付高台)が1点あるだけである。SD 01と同時期のものと想定され、SD 01の巨石が杭やしがらみ材などを伴わない簡易な壠状施設の一部とみるとならば、SD 07は水を得るための溝状遺構と評価できよう。



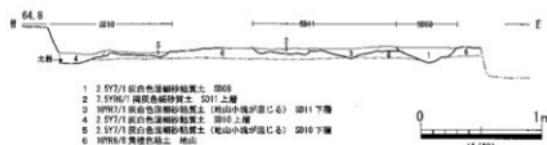
第15図 SD 07断面図 (1/40)

2. C区(北区・南区・東区)

溝状遺構

SD 08 (第16図)

C北区の中央で検出した緩やかに弧を描く溝状遺構でSD 11の埋没後に掘られている。後世の削平



第16図 SD 08・10・11断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)

を受けて溝底部分しか残っていないが、検出長14m、幅0.9m、深さ0.1mを測り、N 47° WからN 23° Wに方向を変えてSD 10・11と同じ方向をとるようになる。断面形状は浅い皿型を呈する。遺物は図示した21の土師器土釜の口縁部など、中世に比定できる土器片がわずかに出土している。

SD 10 (第16・17図)

C区北中央で検出した溝状遺構である。検出長11.6m、幅1.9m、深さ0.1mを測り、N 26° Wの方向を有する。調査区南壁付近で後述するSD 11との重なり具合から、SD 11の埋没後に掘られたことがわかる。後世の削平によつて溝底部分しか残っていないが、断面形状は浅い皿型を呈し、底面は凹凸が著しい。図示することはできなかつたが中世と思われる土器小片がわずかに出土している。

SD 11 (第16図)

C区北中央で検出した溝状遺構で、後世の削平を受けて溝底部だけが残っている。検出長13.3m、幅1.3m、深さ0.1mを測り、断面形状は浅い台形を呈する。SD 08の北半とほぼ同じN 24° Wの方向を有しているが、このSD 08・10・11の方向はB区のSD 05とも同じ方向であり、中世の段階でこの付近には一定の方向に関する規制が存在したことが推測される。

溝状遺構内からの出土遺物はわずかだが、20の土師器土釜の脚部などがあり、中世に位置づけることができる。

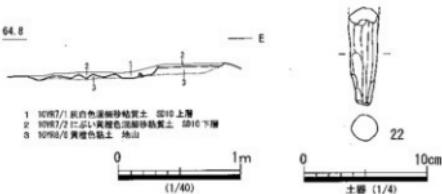
3. D・E区

掘立柱建物跡

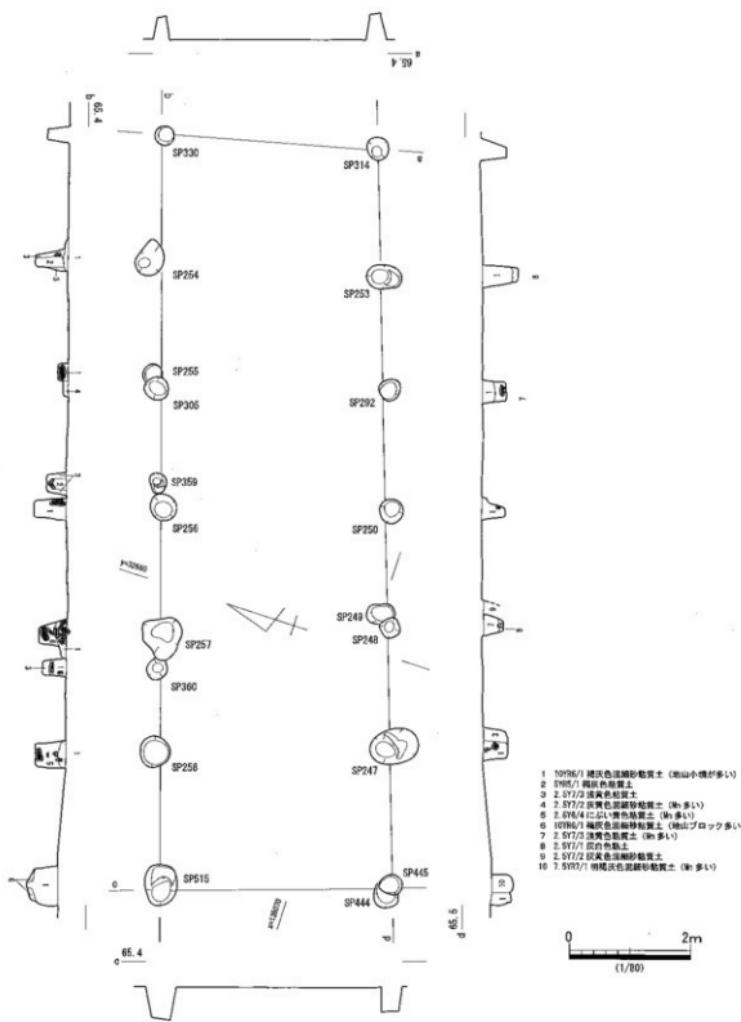
SB 03 (第18・19図)

D区中央付近で検出した梁間1間(3.8m)×桁行6間(12.6m)の規模を持つ東西棟の掘立柱建物跡である。床面積は47.9m²を測る。建物主軸はN 72° Eの方向を有している。北辺の柱穴3個と南辺の柱穴2個には重なりある柱穴が見られることから、この場所に置いて建て替えが行われた可能性がある。柱穴は直径0.4~0.7mの円形ないし梢円形で、SP 255・359・256・257・360・258・247・248・292には根石もしくは詰石と考えられる川原石がみられる。建物の南側約2mのところに主軸とほぼ同じ方向を持つ柱穴列があり、SB 03は南側に底が設けられていた可能性もある。

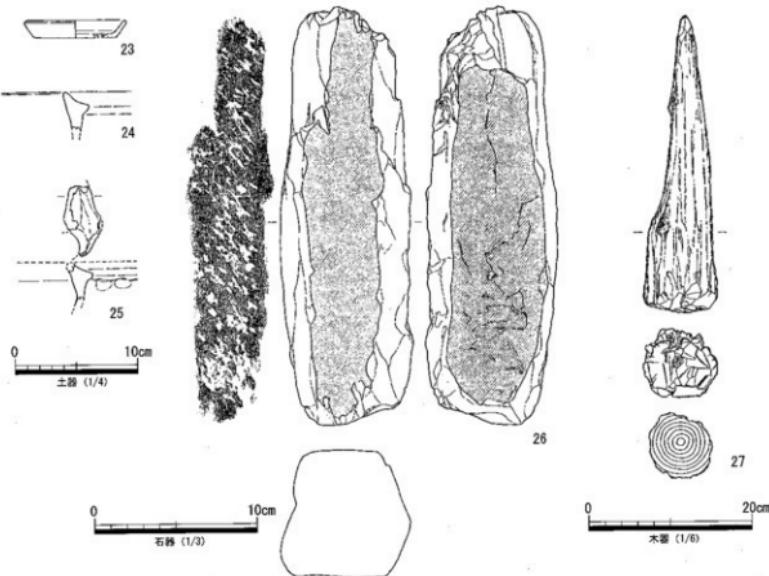
遺物は少なく、23の土師器小皿(SP 247)、24の土師器土釜(SP 257)、土師器土鍋(SP 314)、26の砥石(SP 250)、27の柱材(SP 249)は図示できたが、これ以外に施釉陶器小片やキセル雁首片などがあり、SB 03の年代は近世(江戸時代)に位置づけられる。23や24などの中世土器は周辺



第17図 SD 10断面図(1/40)・遺物実測図(1/4)



第18図 SB 03平・断面図 (1/80)



第19図 SB 03 遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)

に中世の遺構の存在を示唆するものである。

SB 01 (第20図)

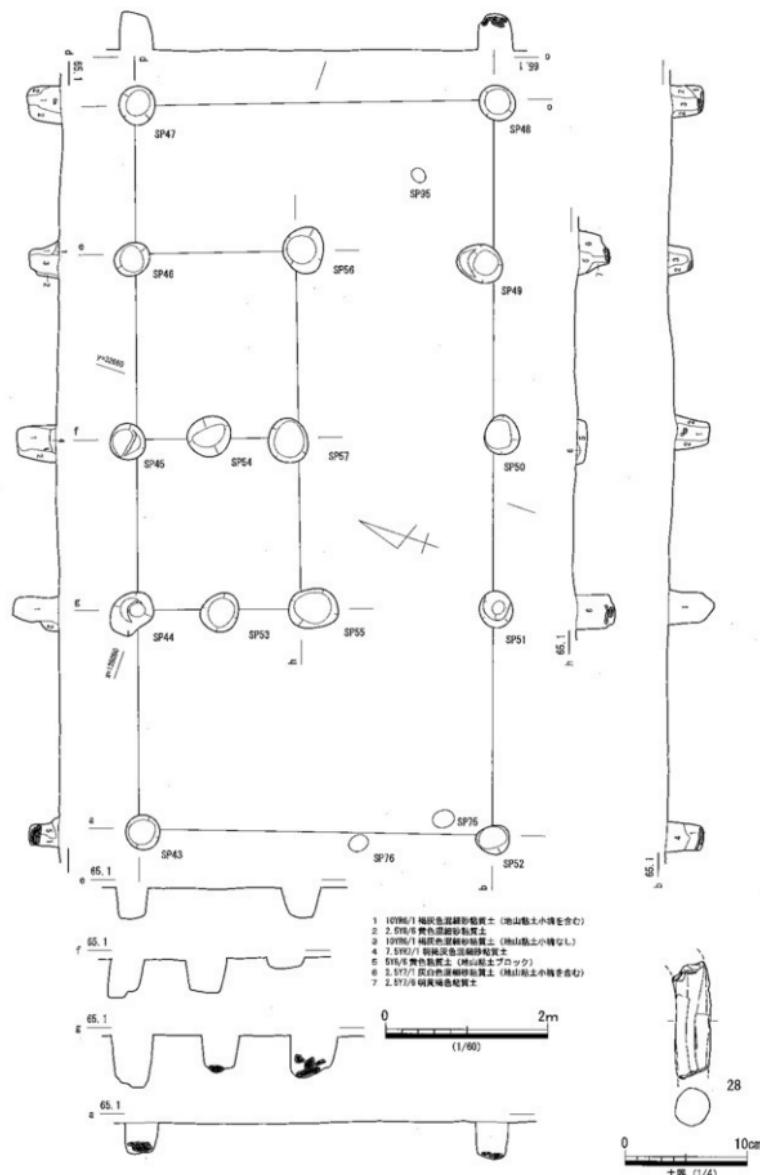
E区南寄りで検出した梁間1間(4.4m)×桁行4間(9.0m)の規模を持つ東西棟の掘立柱建物跡である。床面積は39.6m²を測る。建物主軸はN 71° Eの方向を有しており、先述したSB 03と同じ方向を持つ。中央に間仕切りのための柱穴を有している。柱穴は直径0.3~0.6mの円形ないし楕円形で、SP 43・48・52・53・55・56には根石もしくは詰石と考えられる川原石が認められる。

遺物は少なく、SP 50から出土した土師器土釜の脚部片(28)が図化できたにすぎない。このほかはSP 55から豊島石製の石臼の破片が、SP 51から染付小片がでており、それらからSB 01の年代は近世(江戸時代)に位置づけられよう。

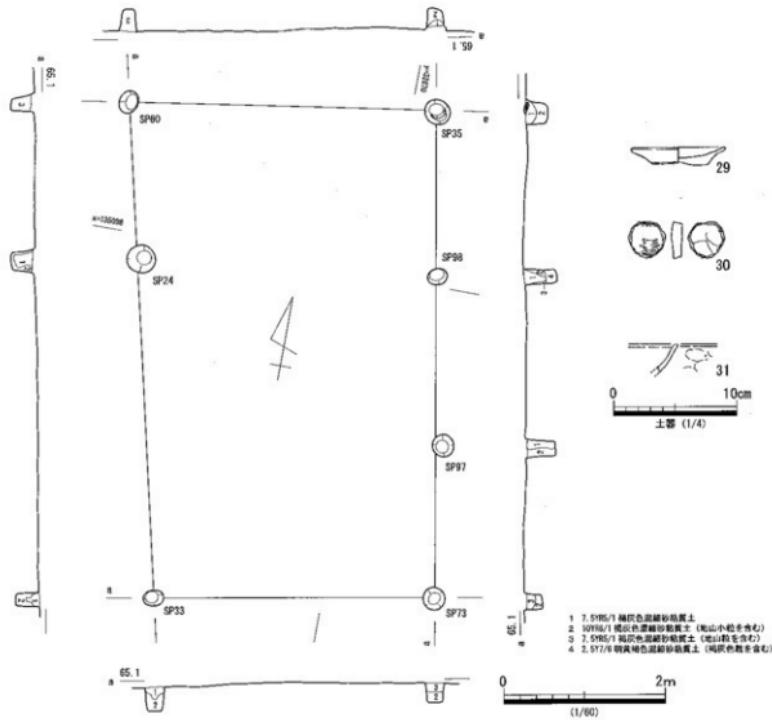
SB 02 (第21図)

E区中央で検出した梁間1間(3.8m)×桁行3間(6.0m)の規模を持つ南北棟の掘立柱建物跡である。床面積は22.8m²を測る。建物主軸N 11° Wの方向を有している。西辺の柱穴1基を後世の遺構によつて失っている。柱穴は円形で直径0.2~0.3mを測る。

遺物は少なく、SP 98から土師器小皿(29)と土師器土釜破片を再利用したメンコ形土製品(30)、



第20図 SB 01 平・断面図 (1/60)・遺物実測図 (1/4)



第21図 SB 02 平・断面図 (1/60)・遺物実測図 (1/4)

S P 73 から瓦器碗 (31) が出土している。小皿の年代観から、SB 02 は 13世紀代に位置づけられる。

土坑

SK 33 (第22図)

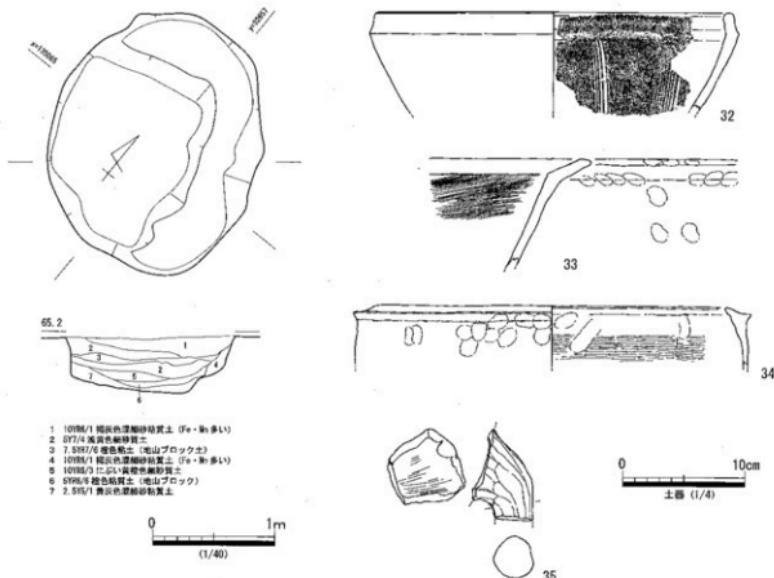
D区南西隅付近で検出した、平面形が不整梢円形の土坑である。長径 1.1 m、短径 0.7 m、深さ 0.1 m を測る。断面形状は浅い逆台形を呈している。埋土は灰褐色混細砂粘質土の單一層で、焼土塊を多く含んでいた。図化することはできなかったが格子タタキ目を持つ須恵器甕の胸部片が出土しており、中世に属する土坑と判断する。

SK 34 (第23)

D区の中央付近で検出した、梢円形の平面を持つ土坑である。長径



第22図 SK 33 平・断面図 (1/40)



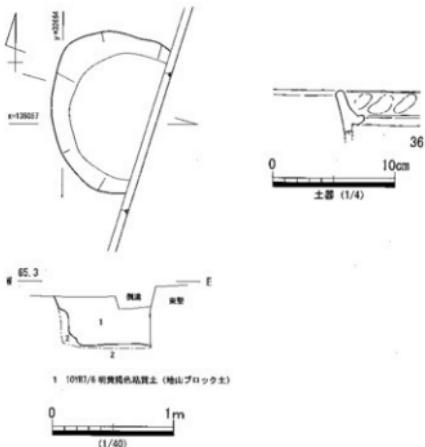
第23図 SK 34 平・断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)

2.2 m、短径 1.8 m、深さ 0.5 m を測る。断面形状は逆台形で、土坑の北・東部には小さな平坦面を削り出して二段掘りとなっている。埋土の中位と下位には地山ブロック土層があり、2回ほど埋め戻されかけた可能性がある。

32は土師器すり鉢である。卸し目は10条1単位となっている。33は土師器土鍋、34は土師器土釜の口縁部、35は土師器足釜の脚部である。すり鉢や土釜口縁部の形態などから14～15世紀代の年代が想定される。

S K 39 (第24図)

D区の南東隅付近で調査区の壁面に半分かかった状態で検出した、円形の平面を持つ土坑である。直径 1.8 m、深さ 0.4 m



第24図 SK 39 平・断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)

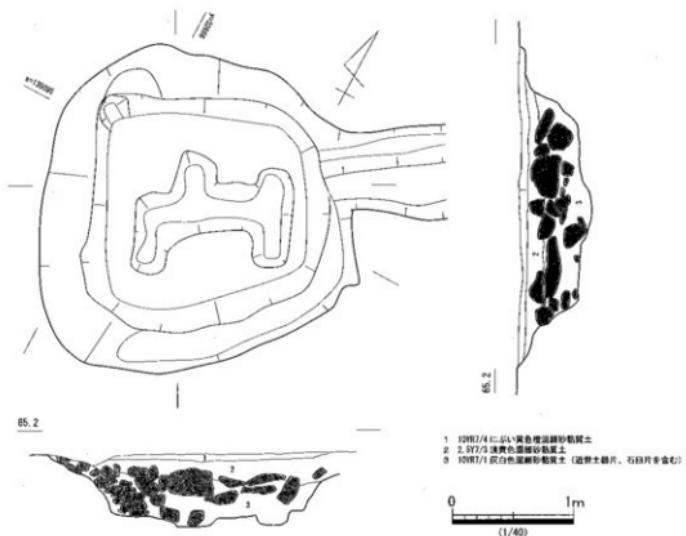
を測り、断面形状は逆台形を呈している。埋土は明黄褐色粘質土の地山ブロック土の單一層で、埋め戻されたものと判断できる。

遺物は極めて少なく、36の土師器土釜片以外には若干の細片のみである。14世紀代の年代が想定される。

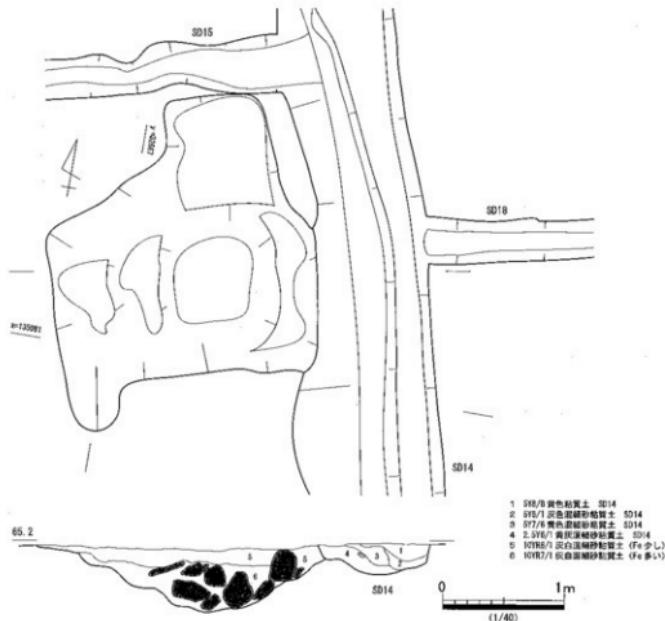
S K 10 (第 25 図)

E 区の中央付近で検出した土坑である。掘り方はいびつな方形をしており、北東隅付近に溝状遺構(S D 19)が付き、溝状遺構は N 62° E の方向に伸びて調査区外へ続いている。掘り方は東西 2.6 m、南北 2.7 m、深さ 0.6 m の規模で、断面形状は逆台形を呈する。掘り方の内部には拳大から人頭大の川原石を石垣状に 3 ~ 4 段積み上げおり、本来は方形をしていたと思われるが、南辺から東辺部分は崩落していた。北辺が裏込め土を使しながらほぼ垂直に石を積んでいるのに対して、残り 3 辺は掘り方の斜面に石を持たせかけるようにして積んでいた。土坑底面には石敷きや曲げ物、樹などの施設はなく、不定形に浅く掘り窪めてあった。湧水はまったくみられないことから井戸ではなく、SD 19 を通して水を引き込んで溜めておくことを目的とした土坑と思われる。

石積み内や石積みの裏込め土などから遺物が出土している。図示しなかったが、17世紀代に位置づけられる施釉陶器の溝縁皿や染付の徳利・片口付き椀、砥石 (第 44 図 103・104)、銅製のキセル吸い口、豊島石製の石臼 1 組と別個体の破片などがあり、17世紀代に機能・埋没していったことがわかる。



第 25 図 S K 10 平・断面図 (1/40)



第26図 SK 13 平・断面図 (1/40)

SK 13 (第26図)

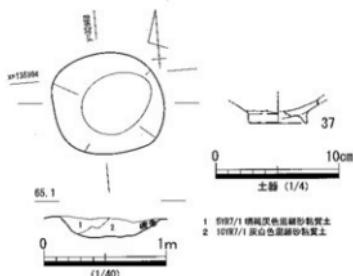
D区とE区の境目付近で検出した土坑である。掘り方は東西に長い長方形 ($2.3\text{ m} \times 1.6\text{ m}$) の北東と南西に張り出しある (北東は $1.0\text{ m} \times 0.8\text{ m}$ 、南西は $0.5\text{ m} \times 0.4\text{ m}$) を付けたような平面形をしている。断面形態は逆台形を呈するが、西側斜面には2段の、東側斜面には1段の地山を削り出した階段状の段を有する。掘り方内部には人頭大の川原石が詰め込まれていたが、明瞭に積んだ部分は認められず、廃棄の際に崩された可能性がある。土坑底面に曲げ物などは見られず、湧水もみられないことから井戸とは考えにくい。また、土層断面の観察からはSD 14に先行する土坑であり、SD 14から水を引き込むことは不可能だが、SD 15がSD 14に先行するものであるならば、そこから水を引き込み溜めておくことを目的とした土坑とみることは可能である。

図示しなかつたが、17世紀代に位置づけられる施釉陶器の溝縁皿や染付、白磁の破片などが出土しており、17世紀代に埋没したことがわかる。

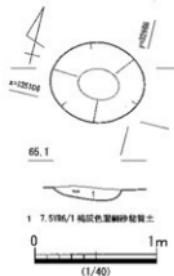
SK 16 (第27図)

E区中央やや北寄りで検出した、隅丸方形の平面をした土坑である。 $1.0\text{ m} \times 0.9\text{ m}$ で、深さ 0.2 m を測る。断面形状は浅い皿形を呈しており、土坑の東斜面には拳大の亜角砾が2段ほど積み上げたような状態でみられた。遺物は細片がわずかしかなく、37の土師器片や黒色土器碗の口縁部破片など

から中世に属する土坑とみられる。



第27図 SK 16平・断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)



第28図 SK 18平・断面図 (1/40)

SK 18（第28図）

E区中央やや北寄りで検出した、橢円形の平面を持つ土坑である。長径0.8m、短径0.7m、深さ0.1mを測る。断面形状は浅い皿型を呈している。埋土は褐灰色混細砂粘質土の単層で、黒色土器B類の碗の破片が出土しており、中世に属する土坑と判断できる。

溝状遺構

SD 41（第29図）

D区中央から南にかけて検出した溝状遺構である。調査区東南隅からN 76°Eの方向で西方に向かい途中で北方へほぼ直角に折れてN 16°Wの方向を有し、北端は後に掘られたSK 34によって壊され途切れている。検出長約13.2m、幅0.4～0.5m、深さ0.1mを測り、断面形状は浅い皿型を呈している。

38は土器師足釜である。口縁部外面のやや下に水平に開く鋤を持ち、12～13世紀代の年代が想定される。ただし、近世の陶器破片も一緒に出土しており、混入品の可能性が高い。

なお、SD 41をさらに北方に延長した位置には、途中で屈曲してN 74°Eの方向を持つSD 54・16・18が存在しており、これらは本来はひとつのつながった溝状遺構であった可能性が高い。とするならば、SD 41（とSD 54・16・18）はコの字形に囲繞する溝状遺構ということができる。



第29図 SD 41・42断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)

S D 42 (第 29 図)

D 区の中央付近や西寄りで検出した溝状遺構である。調査区南壁からほぼ直線的に北方へ向かい、S D 14 と合流した部分で小さなクランク状に折れたのち再び北方へ向かう。調査区北壁付近では再びクランク状に折れてさらに北方へ続いている。検出長約 34.5 m、幅 0.2 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m の規模を測る。断面形状は浅い皿型を呈している。

図示しなかったが、染付、備前焼などの近世陶磁器の破片や砥石（第 43 図 101）が出土しており、それらと共に直径 5 cm 程度の鉄のスラグが 2 点出土している。

この S D 42 を境にして東側は 20 cm ほど高くなっている、柱穴群をはじめとする土坑や溝状遺構などが広がっているが、溝状遺構の西側はわずかな柱穴、土坑がみられるにすぎず、S D 42 は区画溝としての役割を持つ溝状遺構といえる。

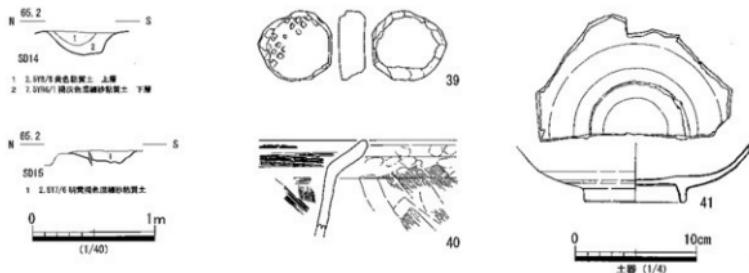
S D 14 (第 30 図)

D 区と E 区の境目付近で検出した、直角に屈曲する溝状遺構である。調査区東壁から N 15° W の方向で直線的に北方へ向かい、途中で西方へ折れて N 71° E の方向を有し、西端はやや幅を広げて S D 42 と直角に接続している。屈曲部のやや手前で S D 15 が分岐する。検出長約 24.5 m、幅 0.4 ~ 1.2 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m の規模を測る。断面形状は浅い U 字形を基本としているが、南北方向部分は底面中央が盛り上がり W 字形を呈している箇所もみられる。

遺物のうち、格子タタキを施した須恵器の大型甕の破片を転用したメンコ形土製品（39）を図示した。ほかに、染付、施釉陶器（京風焼、美濃焼系を含む）、堺産陶器すり鉢、青磁皿、土師器土鍋・すり鉢、砥石（第 44 図 102 を含む）などがあり、17 ~ 18 世紀代に位置づけられる。

S D 15 (第 30 図)

D 区と E 区の境目付近で検出した溝状遺構である。S D 14 から分岐して、約 2 m の間隔で平行しており、西端は S D 42 とぶつかって終わっている。検出長約 16.0 m、幅 0.3 ~ 1.0 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m の規模を測り、N 72° E の方向を有する。断面形状は浅い逆三角形を呈している。先述したように S D 14 の東辺部分は溝底面が 2 条（断面が W 型）になっている部分もあり、S D 15 は東西方向だけでなく、S D 14 と同様に直角に屈曲して南北方向の部分も有していた可能性がある。すなわち、S D 14



第 30 図 S D 14・15 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)

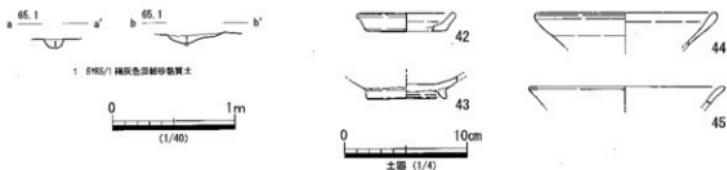
に先行する区画溝が S D 15 であり、それを北方へ拡張したのが S D 14 とみることができよう。S D 42 の S D 15 と接する部分から小さくクランクしていることはその傍證といえよう。また、S D 15 の内側にはひと回り小さい区画溝（先述した S D 41 など）が見られ、次第に区画が拡大していったことが想定される。

遺物の出土量は少なく、図示した 40 の土師器土鍋、41 の施釉陶器（青磁）皿以外に、染付（二重網目文あり）、土師器の細片がある。17～18世紀代に位置づけることができる。

S D 23（第31図）

E 区中央付近で検出した溝状遺構である。S B 02 のすぐ北側に位置しており、S B 02 の主軸方向とはほぼ直角の N 77° E の方向を有している。中ほどで試掘トレーニによって分断されているが、本来はひとつの溝状遺構である。検出長約 10.5 m、幅 0.2～0.4 m、深さ 0.1 m を測り、断面形状は浅い U 字形から浅い逆三角形を呈する。

42 は土師器小皿である。外面に鉄分が付着しており底面の調整は判明しない。43・44 は土師器碗である。45 は黒色土器 B類の碗である。これらの形態から 12世紀末～13世紀の年代が想定される。



第31図 SD 23 断面図(1/40)・遺物実測図(1/4)

柱穴（第32図）

ここでは D・E 区の柱穴から出土した遺物を紹介する。

S P 182 (D 区)

46 は土師器土釜の胴部片を再利用したメンコ形土製品である。片面に土鍋時に付着したススが残る。

S P 212 (D 区)

47 は土師器土鍋の口縁部と判断した。12世紀代のものであろうか。

S P 268 (D 区)

48 は土師器土鍋の口縁部である。中世に位置づけられる。

S P 271 (D 区)

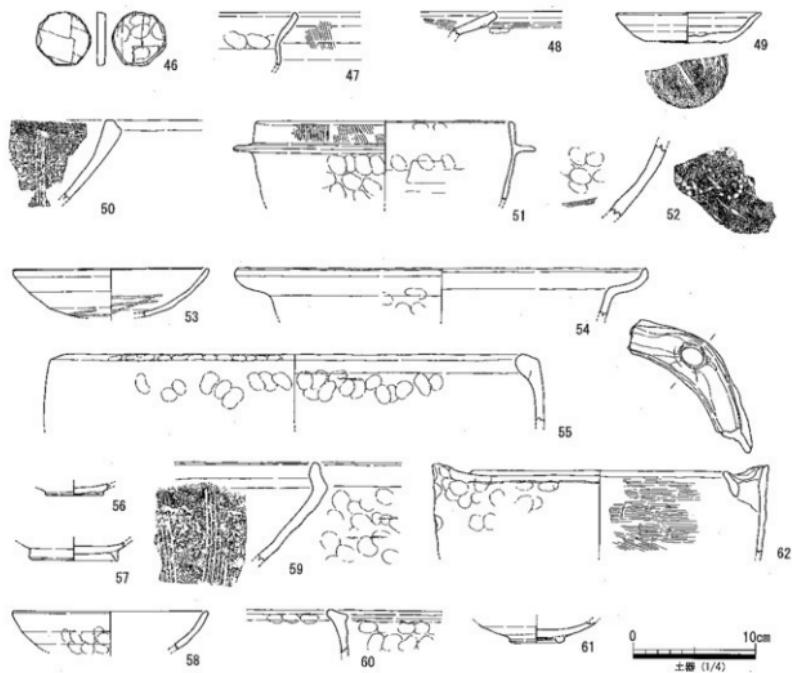
49 は土師器杯である。底部は回転ヘラ削り調整の後に板状圧痕がみられる。13世紀代のものである。

S P 324 (D 区)

50 は土師器のすり鉢である。3条1組の卸し目が施されている。14世紀代に位置づけられよう。

S P 363 (D 区)

51 は土師器の羽釜である。口縁部から下がった位置に水平に開く鋤を持つ。外面鋤の下にススが付着している。近世のものだろう。



第32図 D・E区SP遺物実測図 (1/4)

SP 453 (D区)

52は土師質土器火鉢の胸部と判断した。外面にスタンプ文が施されている。近世に属するものである。

SP 023 (E区)

53は須恵器の椀としたが、いわゆる瓦質土器であろう。磨滅が進んでいるが、13世紀代に位置づけられる。

SP 035 (E区)

54は土師器の羽釜である。口縁部を屈曲させて端部を立ち上がらせている。やや径が大きく復元されたが、11世紀代に位置づけることができよう。

SP 062 (E区)

55は土師質土器の火鉢である。口縁端部を内側に強く肥厚させている。近世のものだろう。

SP 089 (E区)

56は黒色土器の椀である。磨滅が著しいが、黒色土器A類と思われる。中世に属するものか。

SP 090 (E区)

57は土師器椀である。58は瓦器椀としたが、黒色土器の可能性もある。ともに12世紀代に位置づけ

られる。

S P 092 (E 区)

59は土師器のすり鉢である。6条1組の卸し目を施す。中世に属するものか。

S P 093 (E 区)

60は土師器土釜である。觸はかなり退化しており、ほとんど口縁部と一体となっている。外面にはススが付着している。近世のものである。

S P 102 (E 区)

61は須恵器楕の底部である。低い貼付高台を持つ。13世紀代の年代が想定される。

S P 149 (E 区)

62は土師器の土鍋である。穿孔を施した把手が付いている。近世、18世紀代のものだろう。

D・E区には多数の柱穴が展開しており、本来は建物や柵列を構成していたものであるが、復元できたものは少ない。柱穴内に遺物が存在するものは少なく、あっても時期が特定できない破片・小片がほとんどである。上記で年代が推定できるものを集めたが、傾向としてD区には近世に、E区には中世に属するものが多いということができよう。

4. F 区

掘立柱建物跡・柵列跡

S B 04 (第 33 図)

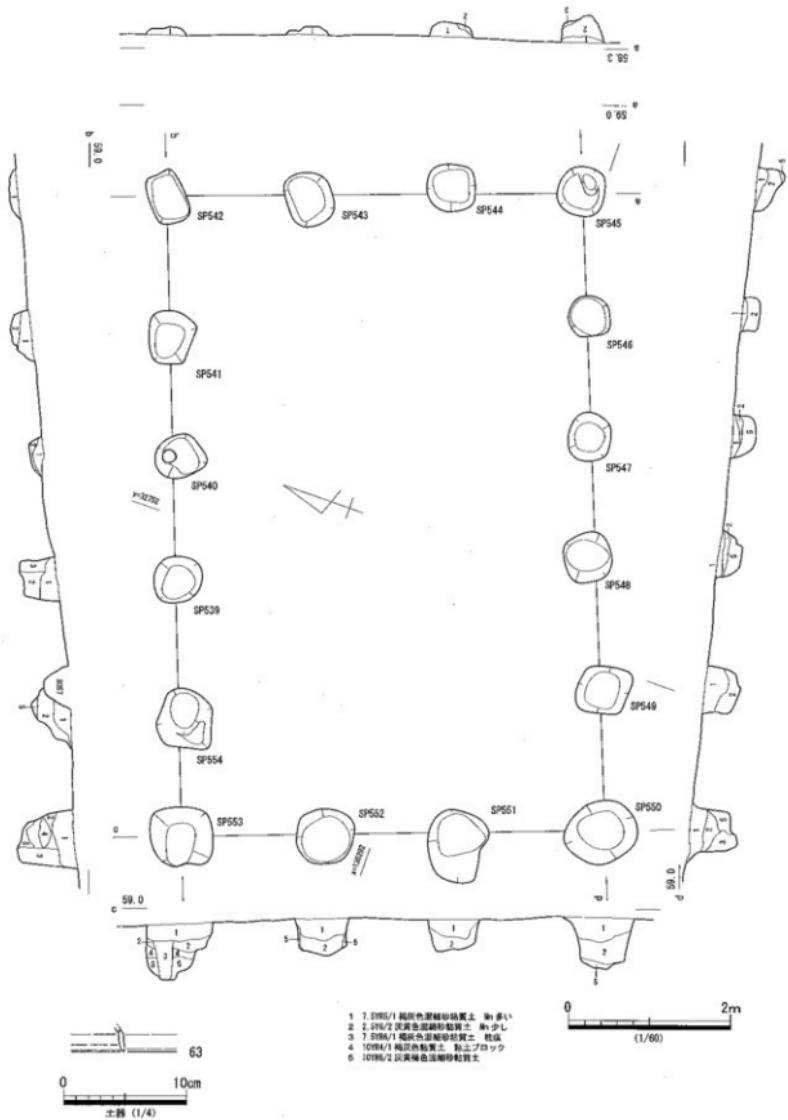
調査区の南半で検出した梁間3間(5.2 m)×桁行5間(8.0 m)の規模を持つ東西棟の掘立柱建物跡である。床面積は41.6 m²を測る。傾斜地に立地しているため、梁行の西辺と東辺では約0.9 mの比高差が生じている。建物主軸はN 70° E の方向を有しているが、この方向は地形の傾斜方向とほぼ一致している。柱穴は隅丸方形を基本としているようだが、円形に近いものも見受けられる。根石や詰石を使用した柱穴はない。S P 539・550・553では柱痕と裏込め土を土層断面で、またS P 540・545・554では柱穴掘り方の底面に柱痕を確認することができ、柱の直径は20 cm前後の木材を使用したことかうかがえる。柱穴には褐色と灰黄色混砂粘質土がみられ、柱を抜き取った後に埋め戻されたとみられる。

遺物はS P 552から63の須恵器杯蓋の口縁部破片が出土しているのみである。6世紀後半頃の年代が想定される。

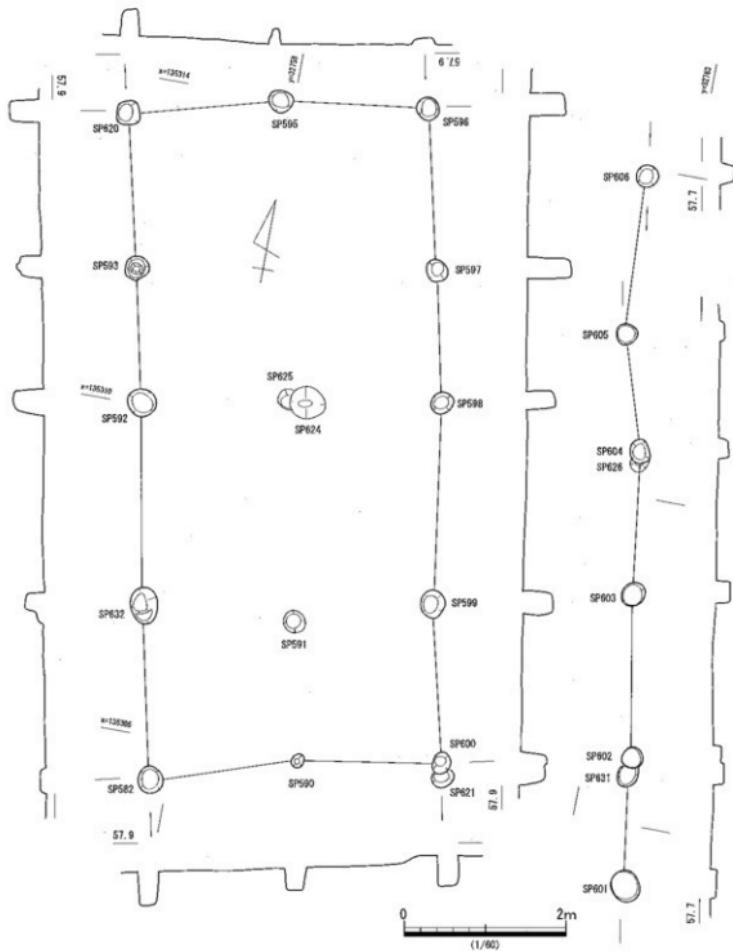
S B 05 (第 34 図)

調査区の中央やや北寄りで検出した梁間2間(3.6 m)×桁行4間(8.2 m)の規模を持つ南北棟の掘立柱建物跡である。床面積は29.5 m²を測る。建物主軸はN 12° W の方向を有している。建物の南側2間分には梁間に柱穴2個(S P 591・625)があり、総柱構造をしていたものと思われる。柱穴は直径0.2~0.4 mの円形ないし橈円形をしている。

遺物はS P 620から須恵器高杯の脚部透かし孔の細片が1点出土しているが、混入品と思われ建物の年代を比定する資料とはなりえない。柱穴の埋土である褐色混砂粘質土はD・E区の中世遺構の埋土と類似するが、これをもって中世の掘立柱建物跡とするにはやや根拠薄弱であろうか。



第33図 SB 04 平・断面図 (1/60)・遺物実測図 (1/4)



第34図 SB 05・SA 03平・断面図 (1/60)

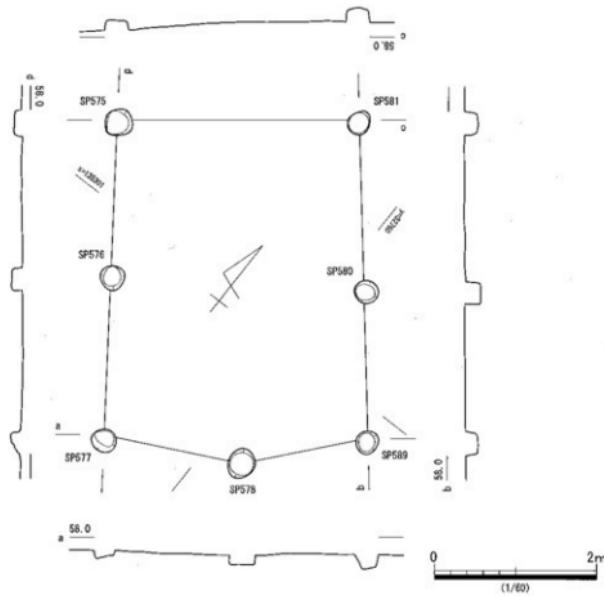
S A 03 (第34図)

調査区のS B 05の東隣で検出した柵列である。N 12° WとS B 05主軸と同じ方向を持ち、2.0～2.5 mの距離で平行している。柱穴6基で5間分、長さ8.8 mの柵列を復元したが、柱穴の間隔は1.6～2.0 mとばらつきがある。柱穴は直径0.2～0.3 mの円形である。遺物はS P 601から須恵器杯蓋細片が1点出土したが、下位に存在するS H 01からの混入品と思われる。方向や柱穴の規模等の類似性からS

B 05 と同時期のものと思われるが、時期の特定は困難である。

S B 06 (第 35 図)

調査区のはば中央で検出した梁間 2 間 (3.2 m) × 衍行 2 間 (3.9 m) の規模を持つ概ね南北棟の掘立柱建物跡である。梁間の北辺には中央に柱穴がないが南辺にはみられることから、梁間 2 間として復元した。床面積は 12.5 m² を測る。建物主軸は N 37° W の方向を有している。柱穴は直径 0.2 ~ 0.3 m の円形で、削平によってかなり浅くなっている。遺物は全く出土せず、建物の時期を比定する資料はない。強いて言えば、埋土は近世遺構の埋土に類似している。



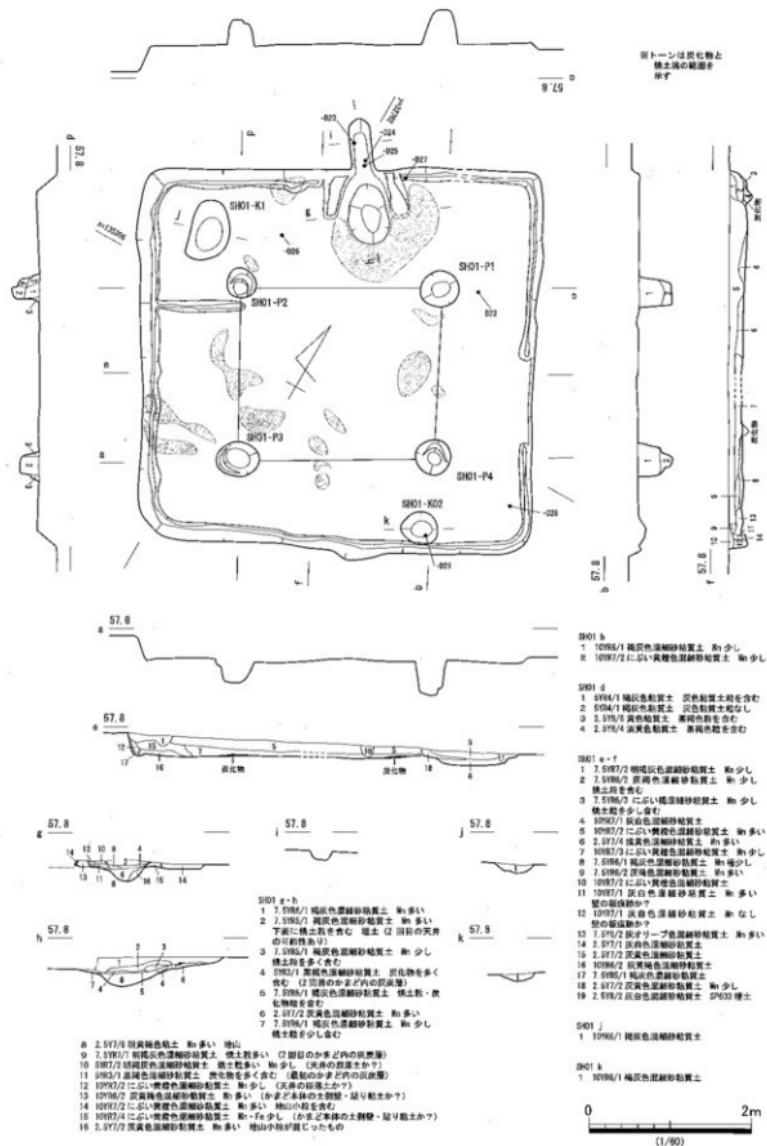
第 35 図 S B 06 平・断面図 (1/60)

堅穴住居跡

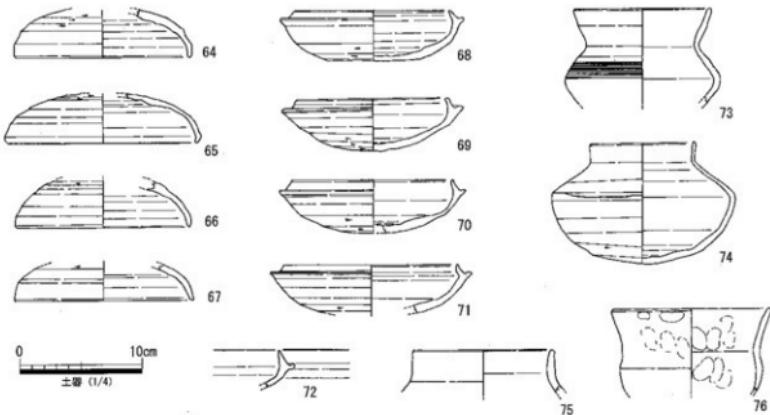
S H 01 (第 36・37 図)

調査区中央やや東寄りで検出した堅穴住居跡である。平面形はわずかに東西方向が長い隅丸長方形を呈し、東西 4.9 m × 南北 4.6 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m を測り、主軸方向は N 28° W の方向を有する。床面は地山層を掘り込んで水平に整地した面をそのまま使用しており、貼り床はみられない。主柱穴は 4 基で、その間隔は東西 2.2 m、南北 2.1 m とほとんど正方形に近い。柱穴の掘り方はいずれも上縁が開いており、廃絶時に柱を抜き取ったことが想定される。壁面に沿って幅 0.1 ~ 0.2 m の壁溝がめぐらされており、東壁中央と北壁の竈部分が途切れている。西壁中央やや北寄りの部分において、壁から柱付近まで長さ 1.1 m の細い溝状遺構が壁溝から連続して掘られている。板材を用いた間仕切りを設けたものと思われる。竈は北壁沿いで、中軸線より東へ 0.3 m 側って設けられている。竈の左側を広く空けることは、先の間仕切りの存在と合わせて、その場所に何らかの用途があったことが予想される。S H 01 では浅い土坑状に掘り窪められている。当該期の須恵器の壺や甕は底部が丸く作られており、それを安定させるために床面を掘り窪められたとは考えられないだろうか。容器を安定させておかなければならぬものとしてまず思い浮かぶものとして水や酒などの液体がある。煮炊きや飲料に使う水を置く場所という空間利用は想定できないであろうか。竈は左右の袖部の基底から盛土によって築いており、住居外の煙道（長さ 0.5 m、幅 0.3 m）が付く。竈内の床面は長径 0.7 m、短径 0.5 m、深さ 0.2 m の土坑状に掘り窪めて竈床としている。竈中央には支脚に転用した土器などは見当たらない。竈焚き口の周辺には灰・炭化物が広がっているが、竈内部から搔き出したものであろう。これ以外に住居床面には炭化物が散らばっているがその量は少なく、柱穴に見られた柱の抜き取りと合わせて、住居廃絶時に上部構造を全て撤去した後で、少量の不要材を燃やしたものであろう。

遺物の出土量は住居規模に比して少なく、廃絶時にほとんど持ち出したようである。64 から 67 は須恵器杯蓋である。口径は 14.0 ~ 15.6 cm で、いずれも端部は丸く仕上げてあり、天井部の 1/3 ほどに回転ヘラ削り調整を施している。肩部の屈曲は弱く、強いナデによる凹線状のものがみられるものもある。68 ~ 72 は須恵器杯身である。口径は 12.4 ~ 14.0 cm で、底部 1/2 ~ 1/3 ほどに回転ヘラ削り調整を施している。口縁端部は丸く仕上げるものと、尖り気味に仕上げるものがある。口縁部の立ち上がりは短い。73 は須恵器壺である。ソロバン玉形の胴部に長めに伸びる口縁部が付く。胴部上半にはカキ目を施している。74 は須恵器短頸壺である。胴部中央外面に粘土紐の接合痕がみられる。頸部には蓋をした状態で焼成した痕跡が残る。75 も須恵器短頸壺と思われる。76 は製塙土器である。かなり磨滅している。これらのうち、床面で検出したのは 69・74・76 であとは埋土中からの出土である。なお、他の遺構出土の土器と接合したもの（同一個体と判明したもの）が 2 点見られる。68 は S H 01 埋土出土と溝状遺構 S D 56 出土の破片が、64 は S H 01 埋土と S H 02 埋土出土の破片が接合したものである。土器が割れた（あるいは割った）ものが異なる遺構から出土するということは自然現象としては考えられず、何らかの目的によって人為的な力が働いた結果といえる。堅穴住居跡の廃絶やその後を考える上で興味深い資料といえる。須恵器杯の特徴からこれらは陶邑編年の TK10 ~ 43 並行期に位置づけることができ、S H 01 は 6 世紀中頃～後半の堅穴住居跡といえよう。



第36図 SH01平・断面図(1/60)

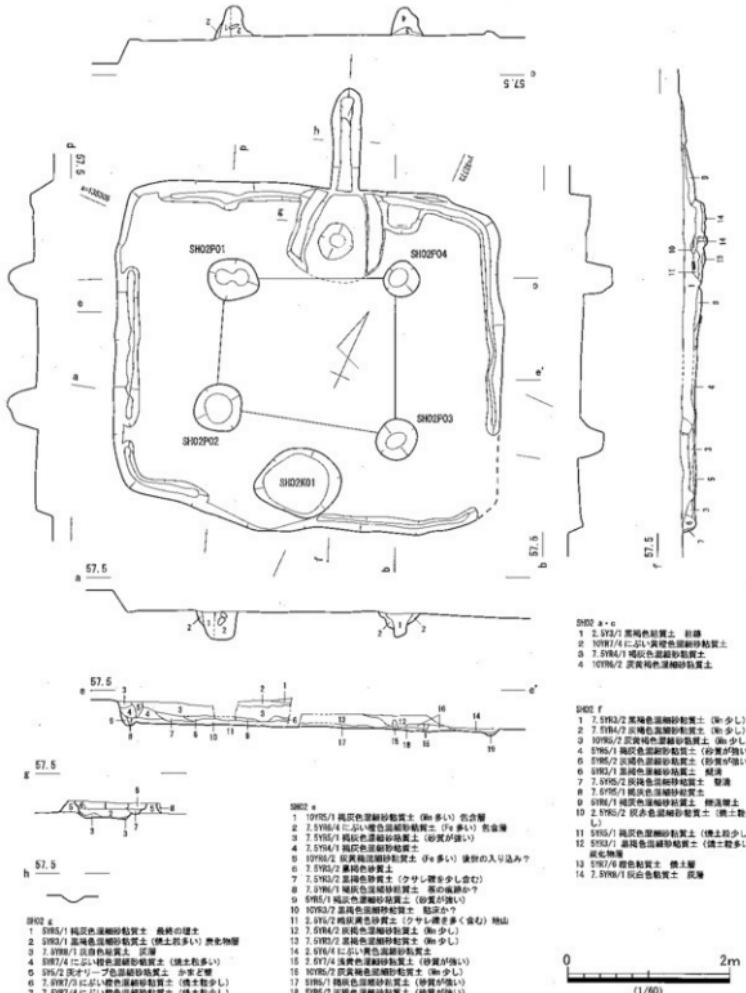


第37図 SH 01 遺物実測図 (1/4)

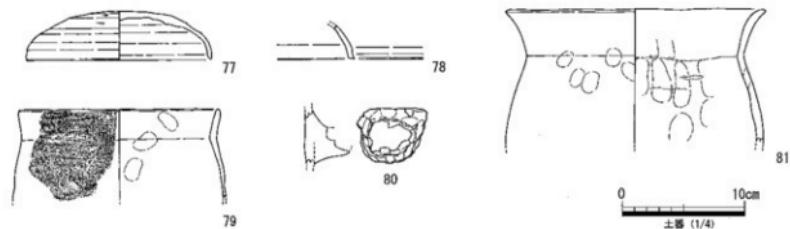
SH 02 (第38・39図)

調査区のSH 01の東方3.4mで東壁にかかって検出し、調査区を拡張して全体を調査した堅穴住居跡である。そのために、東西方向の土層断面図が中央で切れてしまっている。平面形はやや東西方向が長い隅丸方形を呈し、東西4.7m×南北4.3m、深さ0.1~0.3mを測り、主軸方向はN 21° Wの方向を有する。床面は地山層を掘り込んで水平に整地しているが、この部分は地山層中に亜円礫が多く含まれており、若干の貼り床を行っているようである。主柱穴は4基で、その間隔は東西2.1~2.2m、南北1.6~2.0mとややいびつな長方形となっている。柱穴掘り方が堅穴住居跡の大きさの割には大きく、上方が開く形態をしていることから、住居廃絶時に柱を抜き取ったものとみられる。壁面に沿って幅0.1~0.2mの壁溝が部分的に途切れながらもめぐっている。竪は左右の袖部の基底から盛土によって築いており、住居外に煙道（長さ1.2m、幅0.3m）が付く。竪内の床面は長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1mの浅い土坑状に掘り窪めて竪床としている。竪の床面と煙道の底面には明瞭な段がみられる。竪内部には支脚に転用した土器などは見当たらない。南壁沿いの中央付近に長径1.1m、短径0.8m、深さ0.2mの浅い土坑を設けているが、その目的・機能を判断する資料は得られなかった。

遺物の出土量は住居規模に比して少なく、廃絶時にほとんど持ち出したものとみられる。77・78は須恵器杯蓋である。77は口径15.5cmで、天井部のほぼ1/2に回転ヘラ削り調整を施している。端部は丸みを帯びながらもまだ傾斜した面を持つ。内面には當て具痕が残る。78は口縁部の破片だが、端部は明瞭な平坦面を持ちシャープである。79は製塙土器である。外面のタタキ調整が顕著である。80は土師器の把手と判断した。81は土師器甕である。資料数が少ないため年代比定にはやや不安が残るが、須恵器杯蓋の特徴からは鞠邑編年のTK10並行期に位置づけることができ、SH 02は6世紀中頃の堅穴住居跡といえよう。



第38図 SH02平・断面図 (1/60)



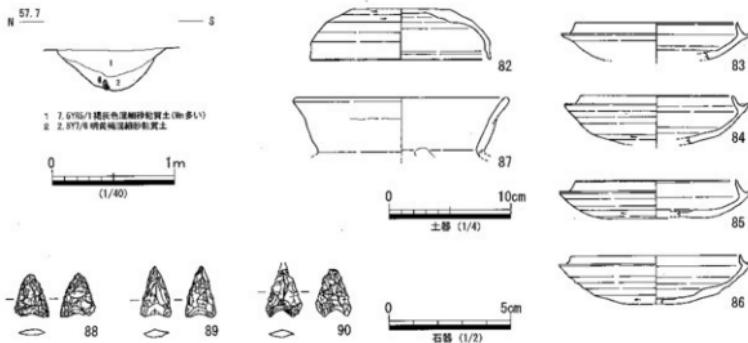
第39図 SH 02 遺物実測図 (1/4)

溝状遺構

S D 56 (第40図)

調査区の北端付近で検出した溝状遺構である。緩傾斜面に立地しており、等高線にはほぼ並行するよう掘られている。緩く弓を描くような溝状遺構で、検出長約12m、幅0.6～1.2m、深さ0.5mを測る。断面形状はU字形を呈している。埋土は2層で、下層には周囲の地山層に含まれている亜円礫が多数含まれていた。

遺物は主に上層から出土しており、土器類以外に石礫、焼土塊がみられる。82は須恵器杯蓋である。口径14.6cmで、天井部の1/3に回転ヘラ削り調整を施している。肩部はナデによる弱い四線状の瘤みがめぐる。口縁端部は明瞭な段を有している。83～86は須恵器杯身である。口径は12.4～13.8cmで底部1/3ほどに回転ヘラ削り調整を施している。口縁部の立ち上がりは短めで、端部は尖り気味に仕上げている。87は土師器甕で、大きく上方へ開く口縁部を持つ。88～90はサヌカイト製の打製石礫である。弥生時代に属するものとみられ、周辺の遺構などからの混入品である。須恵器の特徴から陶邑編年のTK10～TK43並行期に位置づけることができ、SD 56は6世紀中頃～後半にかけて機能したことがわかる。

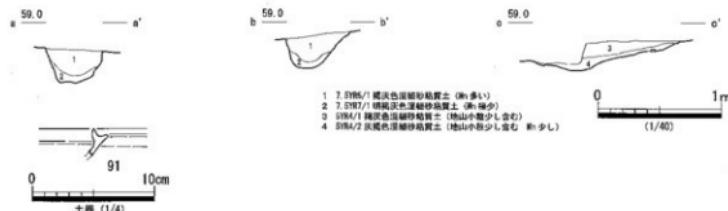


第40図 SD 56 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4 · 1/2)

SD 57 (第 41 図)

調査区の南西隅付近で検出した溝状遺構である。傾斜の強い部分に立地しており、等高線にはほぼ並行するように掘られている。調査区南西隅から北西に伸び、途中で等高線に並行しながら屈曲して方向をやや北へ振って伸びている。検出長約 17 m、幅 0.3 ~ 1.3 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m を測る。断面形状は U字形を基本としているが、屈曲部付近は浅い逆三角形状を呈して幅が広がる。掘立柱建物跡 S B 04 と重なるが、柱穴 S P 554 が SD 57 の埋没後に掘られており、S B 04 に先行する溝状遺構であることがわかる。

遺物は極めて少なく、須恵器・土師器の細片が少量と、弥生時代に属すると見られる混入品のサヌカイト製打製石鎌の破片が 1 点見られる程度である。91 は須恵器杯身の口縁部である。立ち上がりは短く、端部は尖り気味に仕上げている。6 世紀後半頃に位置づけることができよう。

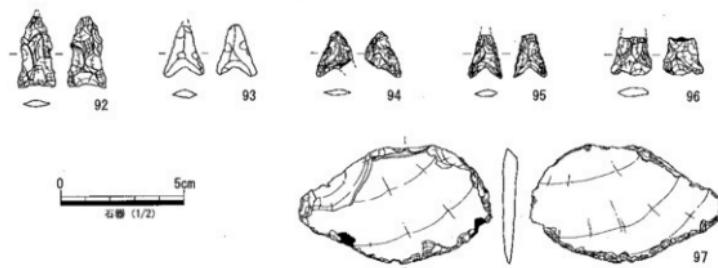


第 41 図 SD 57 断面図 (1/40)・遺物実測図 (1/4)

5. 包含層出土遺物 (第 42 図)

今回の調査では、縄文・弥生時代に属する土器小片や石器が包含層から後世の遺物に混じって出土している。これらは当遺跡周辺に縄文・弥生時代の遺跡が存在することを示唆するものである。当遺跡の周辺には同時代の周知の遺跡は現在のところ知られておらず、今後発見される可能性が高いといえよう。その際の参考資料になることを期して、図化できたものを掲載した。

92 ~ 96 はサヌカイト製の打製石鎌である。92・93 は A 区から、94・95 は C 区北から、96 は C 区東から出土している。92 は凹基式の五角形鎌、93 は押圧剥離の稜線が判別できないほどに風化が進んでいる。94・95 は凹基式、96 は平基式の石鎌である。97 はサヌカイト製の打製スクレイバーである。C 区北から出土している。これ以外にも、A 区や F 区の溝状遺構内などから石鎌が出土している。

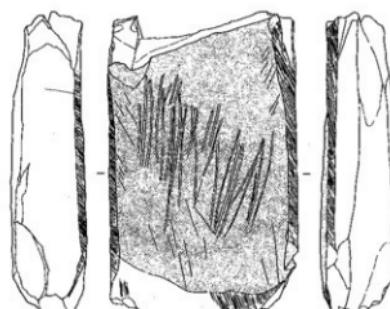


第42図 包含層出土遺物実測図 (1/2)

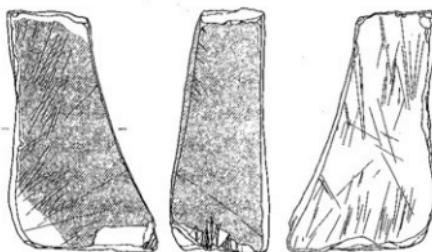
6. 近世の砥石（第43・44図）

D・E区を中心に中世・近世の遺構が広がっていることは先述したが、俊正遺跡ではこの調査区から集中して近世の砥石が出土しているので、ここでまとめて紹介する。

98はC区東SK 27から出土した砥石である。流紋岩か頁岩を使用しており、両側縁部には製作時の鋸痕が残っている。99はD区SK 30から出土した流紋岩製の手持ち砥石である。製作時に付いたと思われる線条痕がみられる。100は99とともに出土したもので参考までに掲載した。平瓦を再利用したメンコ形土製品である。101はD区SD 42から出土した流紋岩製の手持ち砥石である。柱状の直方体をしており4面を砥面として使用している。102はE区SD 14から出土した流紋岩製の手持ち砥石である。平たい直方体をしており3面を使用している。片側の側縁部に製作時の鋸痕が残る。103・104はE区SK 10から出土している。103は安山岩製の砥石で、3面を使用している。104は砂岩製で4面を使用している。使用時についたと思われる線条痕が残る。



98



99

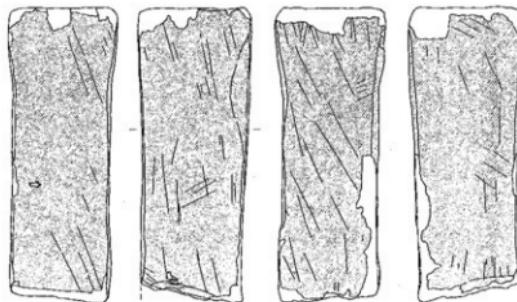


0
5cm
石器 (1/2)



100

0
10cm
土器 (1/4)

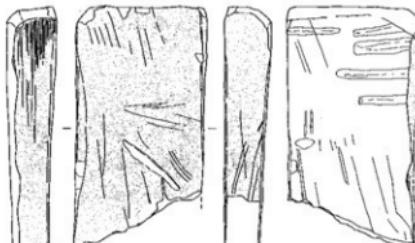


101

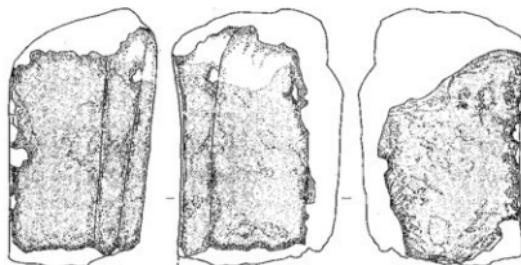


第43図 近世の砥石実測図① (1/4)

0 5cm
石器 (1/2)

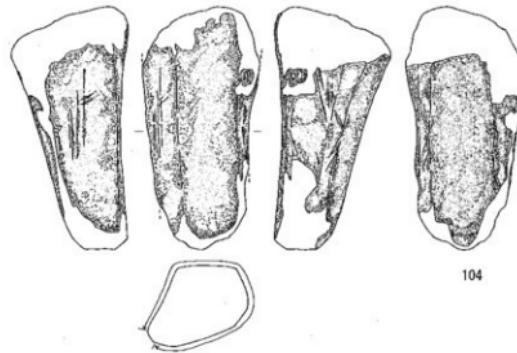


102



103

0 1m
石器 (1/3)



104

第44図 近世の砥石実測図② (1/3・1/2)

第4章 まとめ

遺構の変遷

「第3章第3節 遺構・遺物」では検出した主な遺構・遺物について、調査区ごとに説明した。ここではこれらのデータを基に、俊正遺跡の変遷をみることにする。なお、出土遺物がなく直接時期比定ができなかった遺構については検出方位、位置、埋積状況、他の遺構との先後関係を考慮して該当時期を推定したものも含まれる。

第1期 繩文・弥生時代

遺構は検出していないが、A・C・F区で包含層中から打製石鏃が見つかっている。特にC区北では繩文土器とみられる土器小片も出土しており、周辺に当該期の遺跡が存在している可能性を示唆している。

第2期 古墳時代後期（第45図）

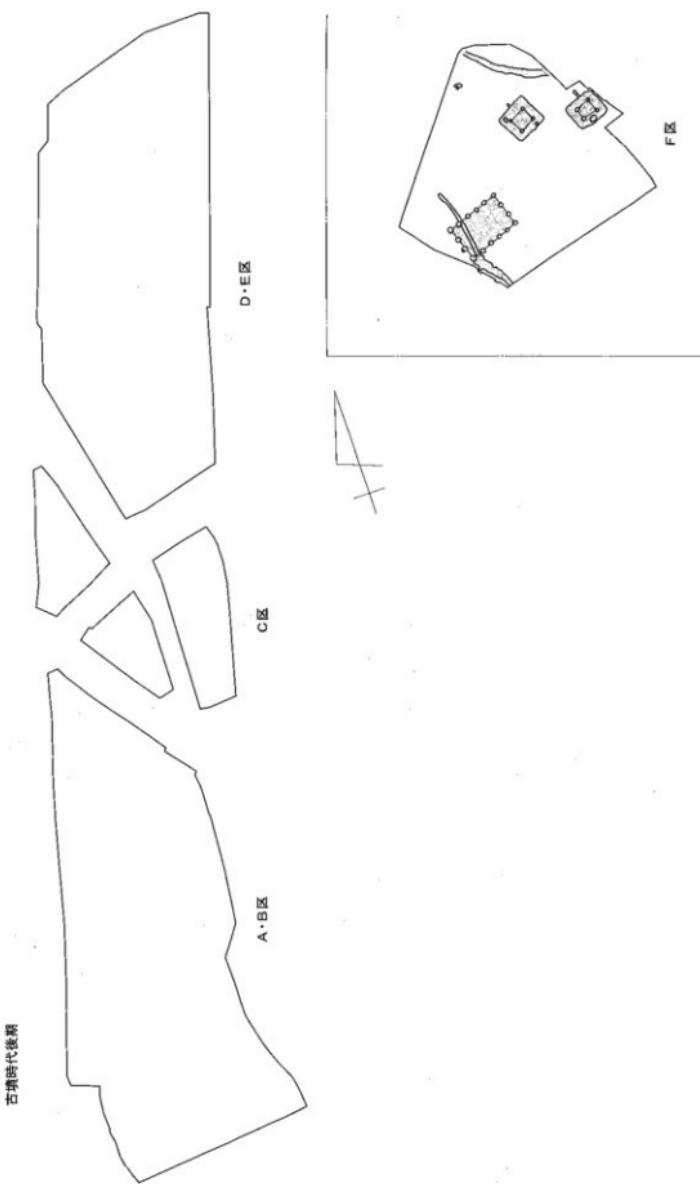
この時期の遺構はF区で集中的に検出している。掘立柱建物跡S B 04、竪穴住居跡S H 01・02という建物遺構のほかに、溝状遺構S D 56・57などがある。S H 01・02は建物主軸が若干異なるものの、ほぼ同時期に存在している。S B 04は出土遺物がごく僅かであり年代比定にやや不安を残すものの、S H 02と主軸が直交する方向をとっており、同時期のものと想定できる。これらの建物で構成される集落は短期間の存続に過ぎず、継続しては営まれない。S B 04とS D 57には重複が見られることから、当該期の中でも細かな時期差が存在していることがうかがえる。

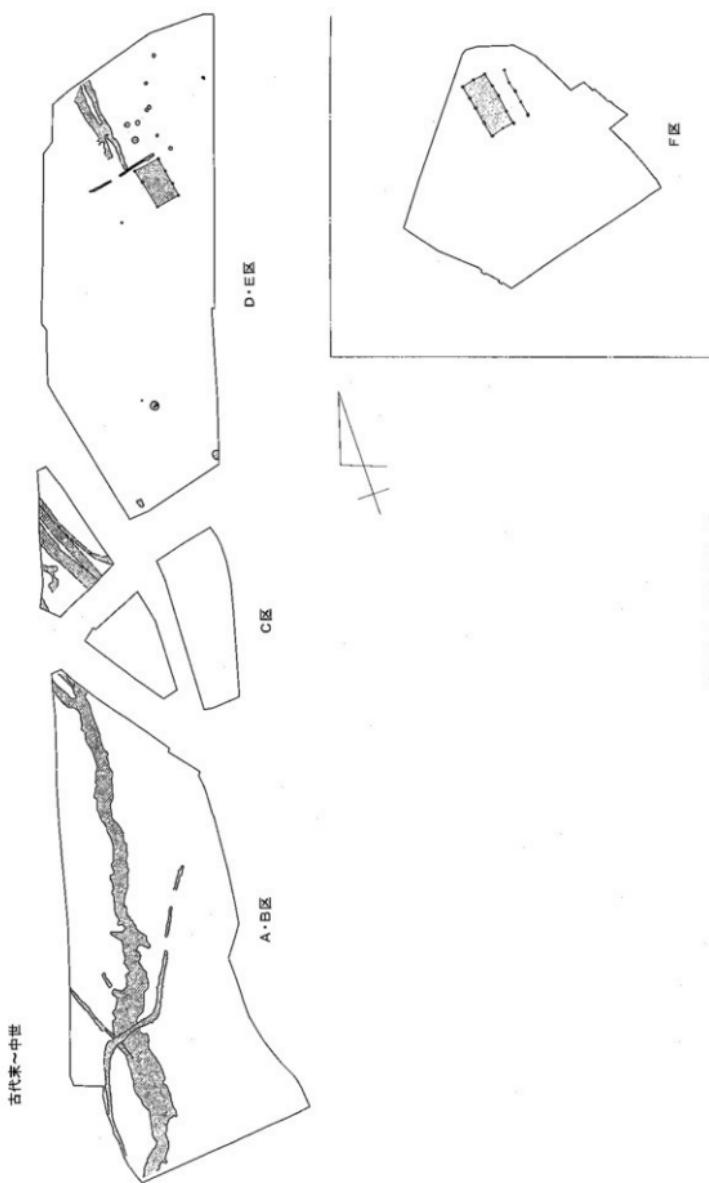
第3期 古代末～中世（第46図）

A・B区およびC区北の溝状遺構S D 01を中心とする構群、D・E区の掘立柱建物跡S B 02や土坑S K 16・33、柱穴などがこの時期に該当する。地形的にも一段高いD・E区は居住城として、逆に低いA～C区は灌漑水路を必要とする水田などの生産域として土地利用されたことがわかる。主水路となるS D 01は長期間の継続使用がうかがえるもので、南端でやや方向を南西にとることから、主水源は遺跡西方を流れる西大東川に求めるのが妥当であろう。一方、D・E区では建物はS B 02の1棟しか復元しえなかつたが、それ以外にも中世遺物を伴う柱穴は散在しており、もう数棟が存在していた可能性が高い。F区で検出した掘立柱建物跡S B 05と槽列S A 03は直接年代が判明する遺物には恵まれないが、S B 02と同じ方向をとり、類似した埋土を持っていることから、当該期に属するものと判断した。となると、F区にも居住城が広がっていたということになる。

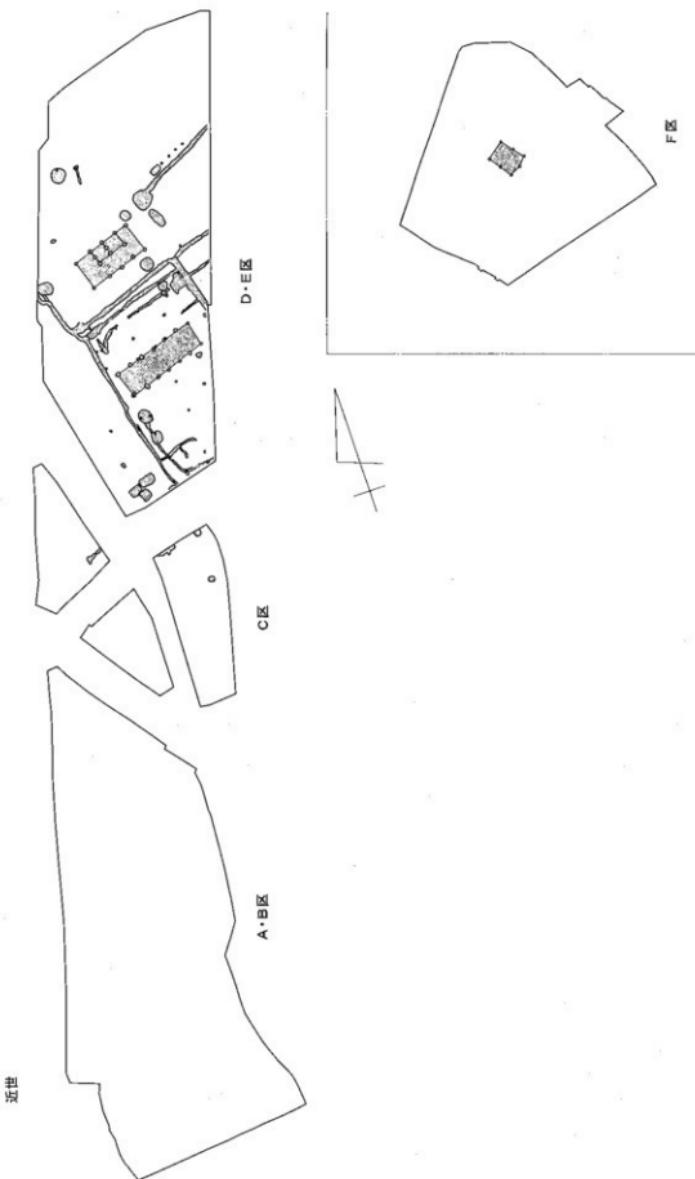
第4期 近世（第47図）

検出した遺構の数量だけで見れば、当該期のものが最も多い。その大半は建物跡を含んだ柱穴であり、溝状遺構、土坑の順で続く。A・B区には当該期の遺構は認められず、C区は少量の溝状遺構と土坑を確認し、F区は掘立柱建物跡1棟を除けば皆無という状況で、D区を中心に濃密な分布を見せ、それ





第47図 造構変遷図(3)



はE区の一部にも及んでいる。溝状遺構には矩形を呈する区画溝がみられ、小規模な区画溝（S D 41・54・16・18）とその外側でひと回り大きな区画溝（S D 42・14）が認められる。小規模な区画溝のほうが大きな区画溝の一部S D 14によって途切れていることから、小規模な区画溝が先行すると思われる。区画内には柱穴が密集しており、掘立柱建物跡S B 03を復元した。これ以外にも、根石や踏石を持つ柱穴もあり、複数の掘立柱建物が建て替えられながら作られた結果、多数の柱穴群となったものである。E区では区画外でも掘立柱建物跡S B 01の1棟を復元できた。総柱構造ではないが間仕切りの柱穴を有している。区画の内外には土坑も存在している。土坑の中には床面が水平で壁面が垂直に近い形態を持つものも見られ、大きな木桶を埋め込んで使用した土坑が存在したことがわかる。区画内のSK 13、区画外のSK 10は内部に石材を使用した方形の土坑であるが、いずれも底面は湧水層には達しておらず井戸と見なすことはできない。今回の調査対象地内では井戸は確認できていない。区画を持つ居住域と言えば、当該地周辺には江戸時代初期（寛永年間）の大庄屋・岡田久次郎の屋敷（岡田屋敷）の伝承があり、その関連性が注目されるが、今回の調査においては、直接それを証明できる資料は確認できていない。

以上のように、俊正遺跡では、第2～4期の3時期に集落の存在が確認できた。第2期の集落は溝状遺構が調査区外に延びていることからも、調査区の北西・南東両側に広がる可能性がある。第3・第4期の集落が立地する平坦面が東側に続いていることから調査区の東側へ広がっている可能性が高い。特に第4期の区画を伴う集落は「岡田屋敷」との関連に注意を払う必要がある。

＜参考文献＞

- ・香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター他
『国道ハイバス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 平成5年度』1994
- ・香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター他
『国道ハイバス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 平成8年度』1997
- ・香川県教育委員会他
『一般国道32号高瀬ハイバス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2巻 羽間遺跡』2007
- ・香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター他
『中小河川大東川改修工事(津ノ郡橋~弘光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』1992
- ・香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター他
『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡IV』2000
- ・維歌郡維歌町
『維歌町史』1976
- ・佐藤龍馬「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」
『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』1993 関西大学

觀 察 表

土壤觀察表 (1)

参考											
層位	層位名	層序	層厚	外觀	色	質	土	法	量	國	層
1	層位1 銀灰 帶綠	S201	土師器 小皿	10φ7/2 に5φ1 板地	2.578/2 灰白	石英· 長石 黃鐵 金雲母	角閃石 斜長石	砂·粒 細·少	(8.4) 1.5 (7.5)	外部 内部	灰白平 面
2	29	S201	土師器 杯	10φ7/8 に5φ1 板地	7.575/6 灰白	N2/黑· 10φ6/2 灰黃地	黑 黃鐵 金雲母	中·多	14.0 (13.4) 3.5	4.25 (7.5)	黑色物質が 内面に濃く生む 外側に黒色物質が 付着し、外側に 薄い板地
3	29	S201	土師器 杯	10φ7/2 灰白	2.678/2 灰白	2.678/2 灰白	2.678/2 灰白	粗·少	(13.4) (13.7)	9.2 7.3	灰 灰白
4	29	S201	土師器 杯	10φ7/1 灰白	2.677/1 灰白	2.677/3 灰白	2.677/3 灰白	粗·少	(13.4) (6.4)	3.5 5.5	灰 灰白
5	6	S201	土師器 杯	10φ7/3 灰白	2.677/1 灰白	2.677/3 灰白	2.677/3 灰白	粗·少	14.4 (15.0)	5.6 5.6	灰 灰白
6	6	S201	墨色 土器	10φ7/2 灰白	10φ7/2 灰白	10φ7/2 灰白	10φ7/2 灰白	中·少	15.2 (15.0)	6.3 6.6	灰 灰白
7	29	S201	墨色 土器	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	粗·多	15.2 (15.0)	6.3 6.6	灰 灰白
8	29	S201	墨色 土器	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	粗·少	15.2 (15.0)	6.3 6.6	灰 灰白
9	9	S201	墨色 土器	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	粗·多	15.0	6.3 6.6	灰 灰白
10	10	S201	瓦器	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	粗·少	15.0	6.3 6.6	灰 灰白
11	11	S201	須彌器	6φ7/2 灰白	2.677/2 灰白	2.677/2 灰白	2.677/2 灰白	中·多	(10.0)	6.3 6.6	灰 灰白
12	12	S201	土師器 杯	2.677/2 灰白	2.677/2 灰白	2.677/2 灰白	2.677/2 灰白	中·多	(10.0)	6.3 6.6	灰 灰白
18	S202	須彌器	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	6φ7/2 灰白	中·多	(10.0)	6.3 6.6	灰 灰白
19	19	S202	土師器 杯	2.677/4 灰白	2.677/4 灰白	2.677/4 灰白	2.677/4 灰白	中·多	(10.0)	6.3 6.6	灰 灰白
21	S203	土師器 土壺	7.575/6 灰白	7.575/6 灰白	7.575/6 灰白	7.575/6 灰白	7.575/6 灰白	中·多	(10.0)	6.3 6.6	灰 灰白
22	22	S201	土師器 土壺	10φ7/6 灰白	10φ7/6 灰白	10φ7/6 灰白	10φ7/6 灰白	中·多	(10.0)	6.3 6.6	灰 灰白
23	23	S203	土師器 土壺	2.677/2 灰白	2.677/2 灰白	2.677/2 灰白	2.677/2 灰白	粗·少	(8.3)	1.4 (6.6)	灰 灰白
24	24	S203	土師器 土壺	7.575/4 灰白	7.575/4 灰白	7.575/4 灰白	7.575/4 灰白	粗·多	(10.0)	6.3 6.6	灰 灰白
25	25	S203	土師器 土壺	7.575/6 灰白	7.575/6 灰白	7.575/6 灰白	7.575/6 灰白	粗·少	(7.7)	1.5 4.6	灰 灰白
28	29	S201	土師器 土壺	10φ7/6 灰白	10φ7/6 灰白	10φ7/6 灰白	10φ7/6 灰白	中·多	(10.0)	6.3 6.6	灰 灰白
31	S202	土師器 土壺	7.575/4 灰白	7.575/4 灰白	7.575/4 灰白	7.575/4 灰白	7.575/4 灰白	粗·少	(7.7)	1.5 4.6	灰 灰白

土壤觀察表 (2)

土器觀察表(3)

編文 番号	區版	地名	種類	形質	色 調	外觀	内面	石蓆・ 赤色紅 長石	角閃石 2.5VY6/2 灰白	砂粒 (cm)	體高 (cm)	法 量	頭 部 (cm)	外剖 面 (cm)	筆 部 (cm)	内部 筆 部 (cm)	残 存 率	備 考
53	SP23	關東園 (水質)	碗	2.5VY6/2 灰白	10VY6/2 灰白	中・多	解・少	(16.0)	(33.2)			頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	筆触が濃い、瓦質土器か?				
64	SP35	上野村	手盤	2.5VY6/2 灰白	10VY6/2 灰白	中・多	解・少	(16.0)	(36.7)			頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	頭部の可塑性有り				
65	SP362	土師器 灰白	丸盤	10VY6/2 灰白	10VY6/2 灰白	中・多	解・少	(16.0)	(4.5)			頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	頭部が著しい、内裏小、輪付窓台				
56	SP89	黒色 土器	碗	10VY6/4 灰	10VY6/4 灰	中・多	解・少	(16.0)	(7.2)			頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	頭部が著しい、輪付窓台				
57	SP90	土所器 輪	碗	2.5VY6/1 灰	2.5VY6/1 灰	中・多	解・少	(16.0)				頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	頭部が著しい、黑色土器か?				
58	SP90	瓦器 輪	碗	7.5VY4/1 灰	7.5VY4/1 灰	細・並						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	頭部が著しい、黑色土器か?				
59	SP92	土所器 捲	捲	2.5VY6/2 灰白	2.5VY6/2 灰白	中・多						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	内面の剥落が著しく、脚部は6条一組				
60	SP93	土所器 土金	碗	10VY6/3 灰白	10VY6/3 灰白	粗・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	体部に擦れ痕				
61	SP12	原燒過 輪	碗	2.5VY6/1 灰白	2.5VY6/1 灰白	細・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8					
62	SP49	土所器 土金	碗	10VY6/2 灰白	10VY6/2 灰白	中・多						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	把手付、穿孔 1 個				
63	SP4	原燒過 手輪	碗	N6/1 灰	N6/1 灰	中・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8					
64	SP01	家窯器 手輪	碗	N6/1 灰	N6/1 灰	粗・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8	肩部は凹溝状				
65	31	SB01 須恵器 杯	杯	N6/1 灰	N6/1 灰	粗・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 2/8	肩部は凹溝状				
66	31	SB01 須恵器 杯	杯	N6/1 灰	N7/1 灰白	中・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 2/8					
67	32	SB01 須恵器 杯	杯	N6/1 灰	N7/1 灰	中・多						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 3/8	肩部は直角				
68	32	SB01 須恵器 杯	杯	N6/1 灰	N6/1 灰	中・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 4/8					
69	32	SB01 須恵器 杯	杯	N7/1 灰白	7.5VY4/8 灰	中・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 8/8	内面に赤色顔料が残る				
70		SB01 須恵器 杯	杯	7.5VY7/1 灰白	7.5VY7/1 灰白	中・多						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 1/8					
71		SB01 須恵器 杯	杯	SB6/1 骨灰	SB6/1 骨灰	中・多						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 2/8					
72		SB01 須恵器 杯	杯	W6/1 灰	W6/1 灰	粗・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 2/8					
73		SB01 須恵器 杯	杯	7.5VY7/1 灰白	7.5VY7/1 灰白	中・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 2/8					
74	32	SB01 須恵器 杯	杯	1.5V6/2 灰	5F25/1 青灰	中・少						頭部 横行・ ^{1/2} 斜行 斜行・ ^{1/2} 斜行 斜行	口縫 6/8	頭部をした直角				

土器観察表(4)

機文字 番号	記入欄	縦横 幅	縦横 高さ	外面 裏面	色 具石	陶 土質	鉄 鉄物	砂粒 砂母	口徑 (cm)	周高 (cm)	厚度 (cm)	表面 その他の 特徴 (cm)	裏面 内部	保存状 態	備 考	
75	S501	須恵器 縦横	短筒 5YR6/4 [2.5×4.4]	5YR6/6 [2.5×6.4]	10YR4/2 [2.5×4.2]	系陶									横げ	口縁 1/8 施釉無地
76	32	S502	土師器 縦横	製造 5YR6/4 [2.5×4.4]	5YR6/4 [2.5×4.4]	10YR4/2 [2.5×4.2]	系陶								横げ	口縁 2/8 施釉無地
77	32	S502	須恵器 縦横	杯 6S/4 [2.5×4.4]	6S/4 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	系陶								横げ	口縁 6/8 内面上部に当て施釉が残 る、肩部が細い彫曲
78		S502	須恵器 縦横	杯 7.5YR6/1 [2.5×4.4]	7.5YR6/1 [2.5×4.4]	10YR6/1 [2.5×4.4]	灰								横げ	口縁 1/8 口縁相片
79	33	S502	土師器 縦横	製造 10YR6/3 [2.5×4.4]	10YR6/3 [2.5×4.4]	10YR6/3 [2.5×4.4]	系陶	はい	中・多 (16.4)	中・多 (16.4)	中・多 (16.4)	中・多 (16.4)	中・多 (16.4)	中・多 (16.4)	横げ	口縁 1/8 口縁相片
80		S502	土師器 縦横	把手 5YR5/4 [2.5×4.4]	5YR5/4 [2.5×4.4]	5YR5/4 [2.5×4.4]	系陶								横げ	把手 5/8 把手に彫か
81	33	S502	土師器 縦横	把手 6YR6/6 [2.5×4.4]	6YR6/6 [2.5×4.4]	6YR6/6 [2.5×4.4]	系陶		中・多 (21.2)						横げ	把手 5/8 把手に彫か
82	33	S506	須恵器 縦横	平蓋 7.5YR7/1 [2.5×4.4]	7.5YR7/1 [2.5×4.4]	7.5YR7/1 [2.5×4.4]	灰白		中・多 (14.0)	4.2					横げ	口縁 1/8 肩部は深い凹線?
83		S506	須恵器 縦横	平蓋 8Y/4 灰白	8Y/4 灰白	8Y/4 灰白	灰白		中・少 (13.0)						横げ	口縁 1/8 口縁相片
84	33	S506	須恵器 縦横	把手 N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	灰白		中・少 (12.4)						横げ	口縁 1/8 口縁相片
85		S506	須恵器 縦横	把手 Ns/4 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	系陶		中・少 (13.4)	3.1	(3.8)				横げ	口縁 1/8 口縁相片
86	33	S506	須恵器 縦横	把手 2.5YR6/1 [2.5×4.4]	2.5YR6/1 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	系陶								横げ	口縁 3/8 かぶりに蓋を重ねて重 ね施釉アーチ窓有り
87		S506	土師器 縦横	把手 10YR7/3 [2.5×4.4]	10YR7/3 [2.5×4.4]	10YR7/3 [2.5×4.4]	系陶		中・多 (17.7)						横げ	口縁 1/8 外縁の増減が感じ
91		S507	須恵器 縦横	把手 Ns/4 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	系陶								横げ	口縁相片
100		S507	平瓦 1.7×4 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	Ns/4 [2.5×4.4]	系陶								横げ	平瓦片を割り、完形

石器観察表

器文	器 種	報告者姓名	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	特 徴	備 考
16	30	S001	石 動	27.5	12.5	3.0	0.77	サヌカイト	四基本、風化が進む
17	30	S002	石 動	18.0	14.5	3.0	0.58	サヌカイト	四基本
20	30	S0250	石 動	23.0	5.0	2.20	サヌカイト	四基本	
26	30	S0250	石 動	274.0	65.0	64.0	329.0	施設を有する 2面を用ひ 尖端と基部の一端を欠損	四基本
88	33	S056	石 動	17.5	14.0	2.5	0.48	サヌカイト	四基本、基部の一部を欠損
69	33	S056	石 動	20.0	13.0	2.0	0.78	サヌカイト	四基本、基部の一端を欠損
90	33	S056	石 動	19.0	15.0	3.0	0.79	サヌカイト	四基本、基部と臺部の火焔(ひえいもの)黒化が進む
92	30	A区包含層	石 動	20.0	2.5	1.16	0.72	サヌカイト	四基本、玉角形施設、尖端を欠損する
93	30	A区包含層	石 動	21.0	16.5	3.5	0.72	サヌカイト	四基本、尖端が基部を強く屈曲する
94	C区包含層	石 動	19.0	15.0	2.0	0.38	サヌカイト	四基本、先端と基部の一端を欠損	
95	C区包含層	石 動	17.0	2.5	0.51	0.51	サヌカイト	四基本、先端を欠損	
96	C区包含層	石 動	15.0	16.0	3.0	1.00	サヌカイト	四基本	
97	30	C区包含層	スクレーパー	78.5	46.5	4.0	20.96	サヌカイト	四基本
98	34	S027	研 石	126.0	78.0	29.0	42%:23	施設を有する 施設を有する	製作時の施設が残る
99	34	S040	研 石	110.0	68.0	36.0	31.2:67	施設を有する 施設を有する	製作時の施設が残る
101	34	S042	研 石	121.0	46.5	39.0	423.93	4面を用ひ 施設を有する	製作時の施設が残る
102	34	S014	研 石	100.0	53.0	17.0	165.07	4面を用ひ 施設を有する	製作時の施設が前面に残る
103	30	S010	研 石	170.0	112.0	90.0	2870.0	3面を用ひ 施設を有する	製作時の施設が前面に残る
104	34	S010	研 石	160.0	77.0	63.5	220.0	3面を用ひ 施設を有する	製作時の施設が前面に残る

瓦観察表

物文番号	瓦級	報告者 機関名	器種	全長(cm) (保存長)	広場幅(cm) (保存幅)	高さ(cm)	土色	色	調	形	特徴	備考
14		S001	平瓦	8.3	8.1	白色	黑色	褐色・多	3/5:1 R白	円筒形 ~ ~ ~	四面 ~ ~ ~	四面 ~ ~ ~
15		S001	平瓦	8.0	6.3	相・多			N/ R R/ N	八切 一 一 一	八切 一 一 一	八切 一 一 一

木器観察表

物文番号	回数	報告者 機関名	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	大吹り	備考
13	29・30	S001	柱材	22.7	13.3	10.1	針金織	みかん入り	加工跡が前面に残る
27	30	S003	柱材	35.8	9.1	8	針金織	芯持	先端が削食して残る

写 真 図 版

図版 1



A区完掘前景（西から）



B区南半完掘状況（南西から）



B区北半完掘状況（南から）

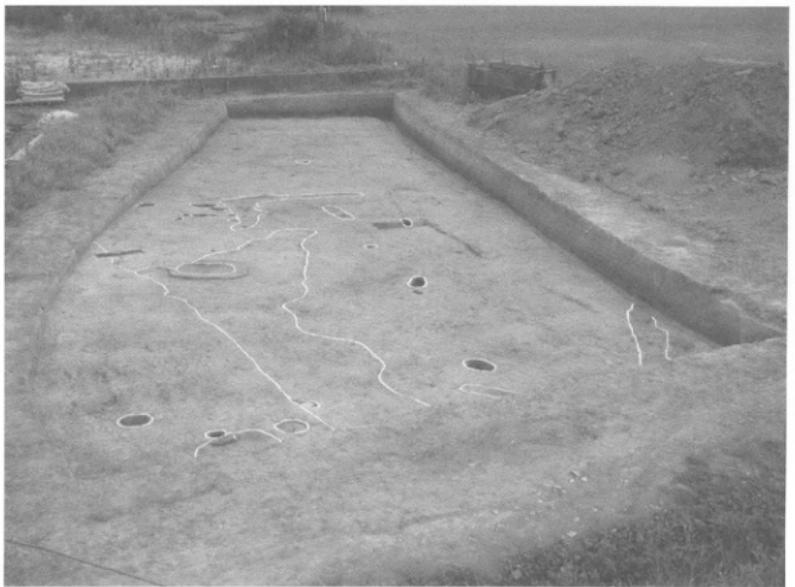


C区北・南完掘状況（南西から）

図版 3



C区北完掘状況（南東から）



C区東完掘状況（北から）



D 区完掘状況（北から）



D 区完掘状況（北から）

図版 5



E区完掘状況（北から）



E区完掘状況（南から）



F区北半完掘状況（西から）



F区南半完掘状況（南東から）

図版7



A区南壁土層断面（北西から）



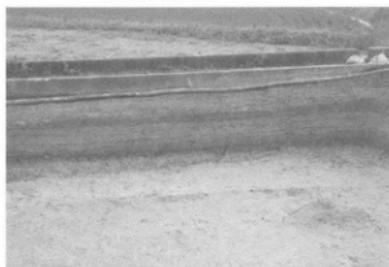
A区東壁土層断面（北西から）



B区東壁土層断面（北西から）



C区東 西壁土層断面（北東から）



C区南 西壁土層断面（北東から）



C区北 南壁土層断面（北東から）



D区南壁土層断面（北から）



D区南壁土層断面（北西から）



D区東壁土層断面（西から）



E区東壁土層断面（北西から）



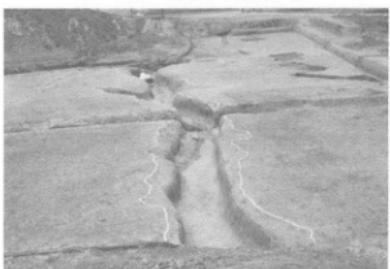
E区北壁土層断面（南東から）



F区西壁土層断面（南東から）



F区北壁土層断面（南から）



SD 01（北半）完掘状況（北西から）



SD 01 断面 b（北から）



SD 01 断面 d（南東から）

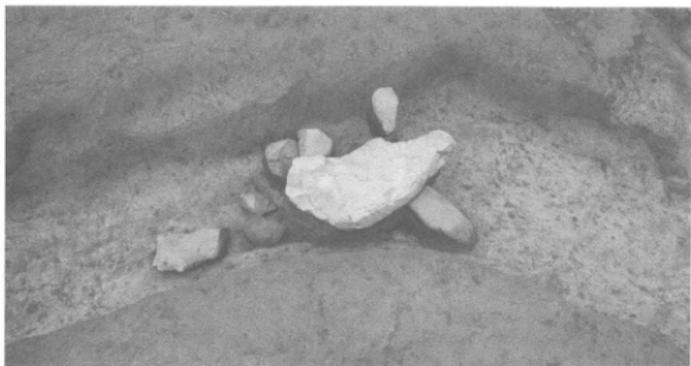
図版 9



SD 01 剖面e (南から)



SD 01 遺物出土状況 (南東から)



SD 01 石材出土状況 (北西から)



SD 01・02・03 完掘状況 (北東から)



SD 01（左）と SD 02（右）完掘状況（南東から）



SD 02 断面（北から）



SD 03 断面（南東から）



SD 03 完掘状況（南東から）

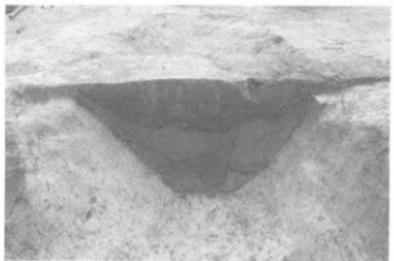
図版 11



SD 01-05 完掘状況（南東から）



SD 05 断面（南東から）



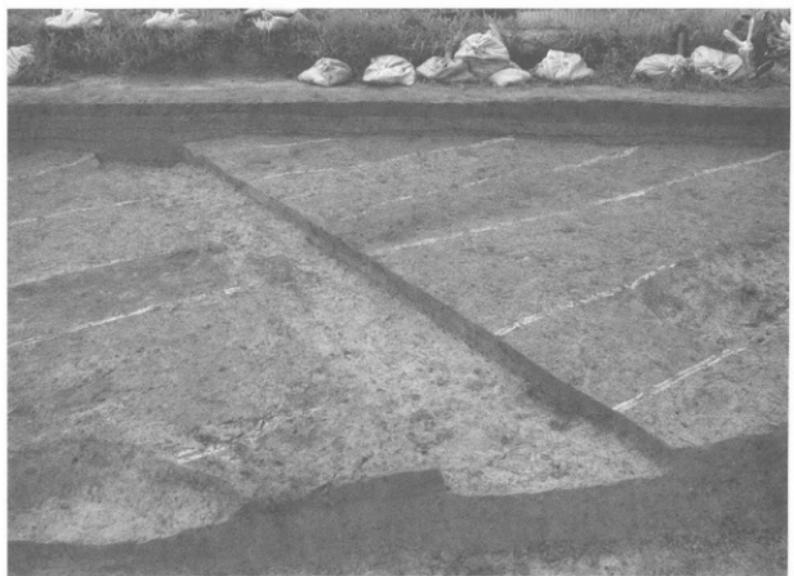
SD 07-01 合流部断面（南東から）



SD 07 断面（南東から）

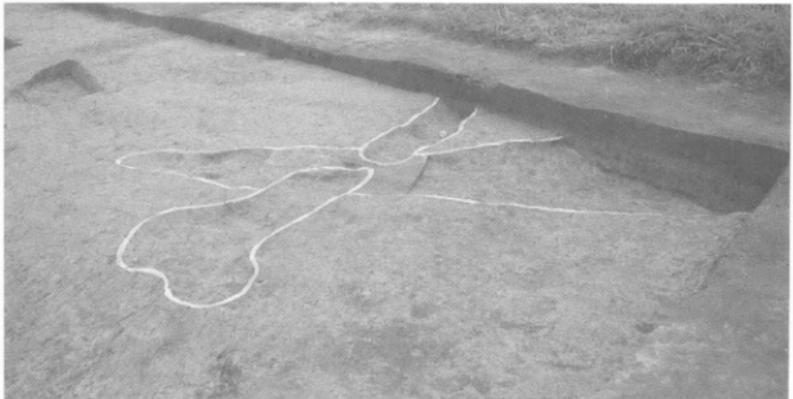


S D 08・10・11 完掘状況（南東から）



S D 08・10・11 断面（東から）

図版 13



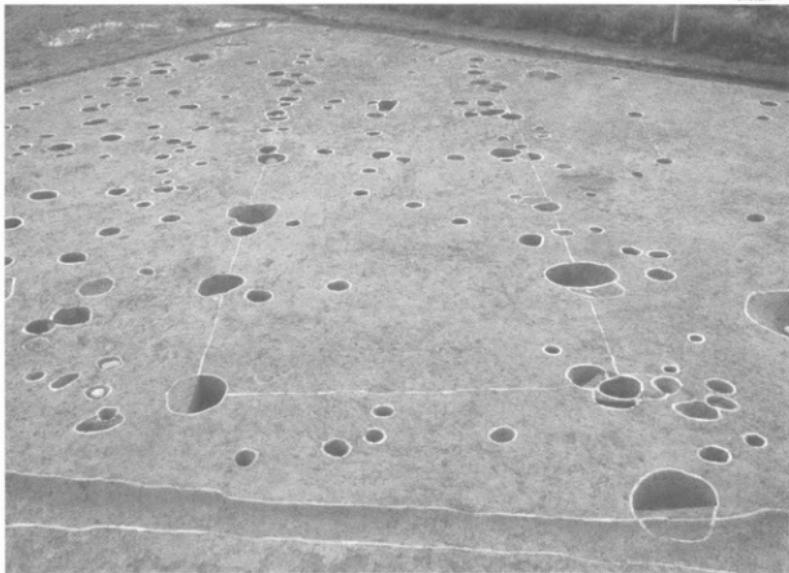
S D 08 南半部完掘状況（南西から）



S D 08・10・11 完掘状況（北西から）



S D 10 断面（南東から）

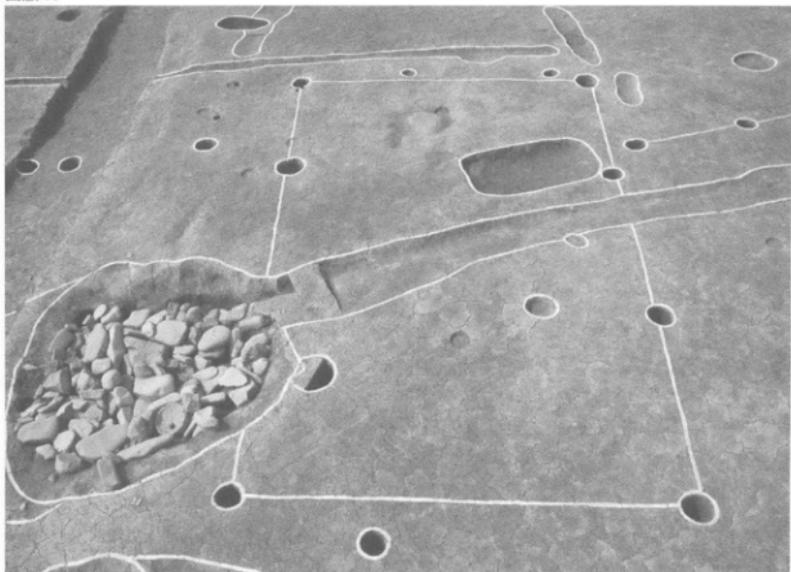


SB 03 完掘状況（南西から）



SB 01 完掘状況（北東から）

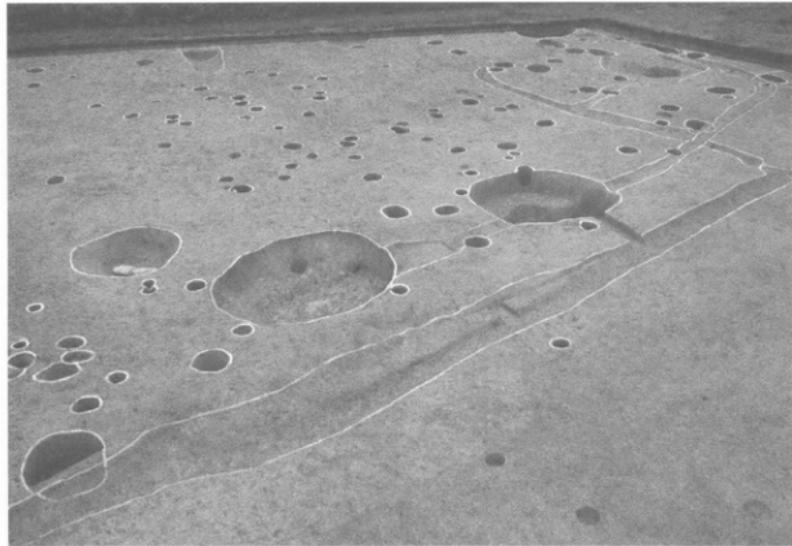
図版 15



SB 02 完掘状況（南東から）



SK 33 ほか完掘状況（北から）



SK 34・SD 41 完掘状況（北西から）



SK 34 断面（南東から）



SK 39 断面（南西から）



SK 10 南北断面（南西から）

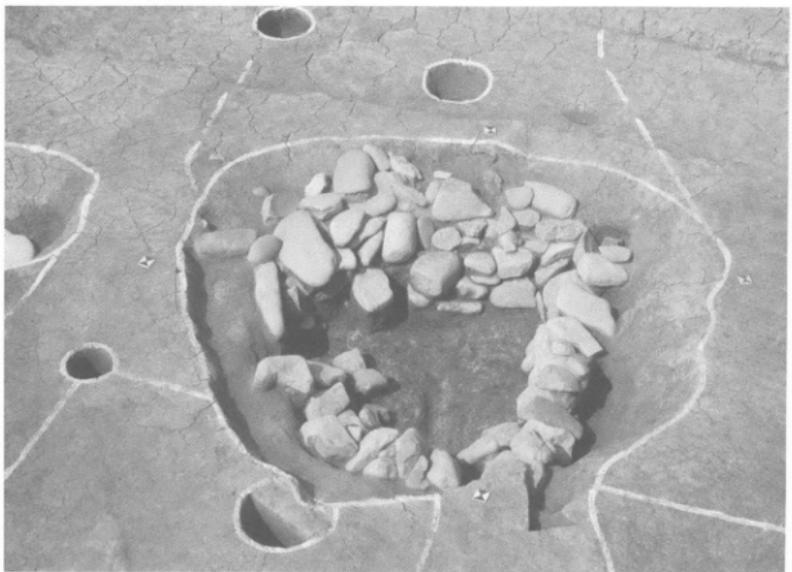


SK 10 東西断面（南西から）

図版 17



SK 10 石検出状況（東から）



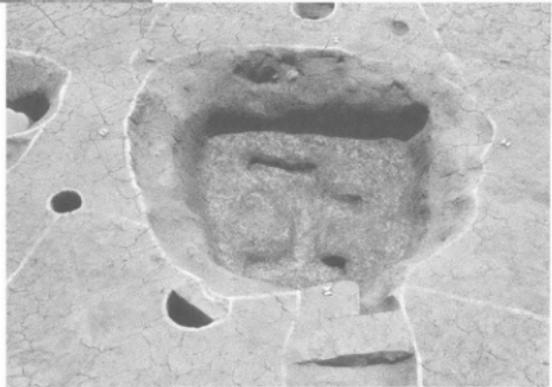
SK 10 石組み完掘状況（北東から）



S K 10 石組み完掘状況（東から）



S K 10 石臼出土状況（東から）



S K 10 完掘状況（北東から）

図版 19



SK 13・SD 14 断面（北西から）



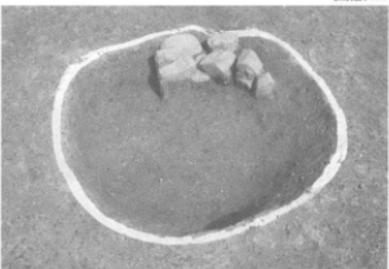
SK 13 石詰め完掘状況（南西から）



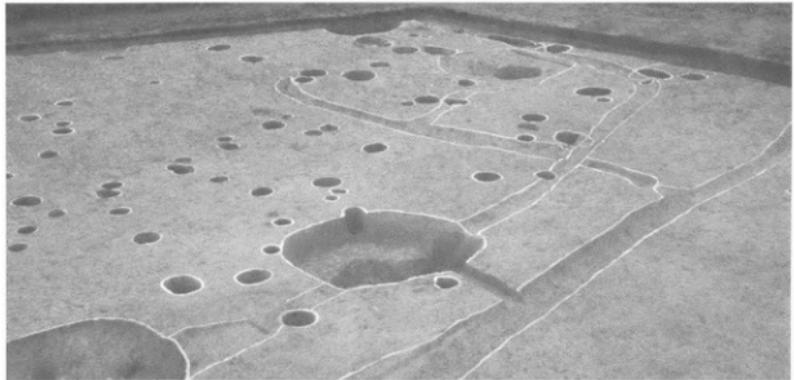
SK 13 完掘状況（南西から）



SK 16 断面 (西から)



SK 16 石組み完掘状況 (西から)



SD 41 完掘状況 (北西から)



SD 42・SD 14・SD 15 完掘状況 (南西から)